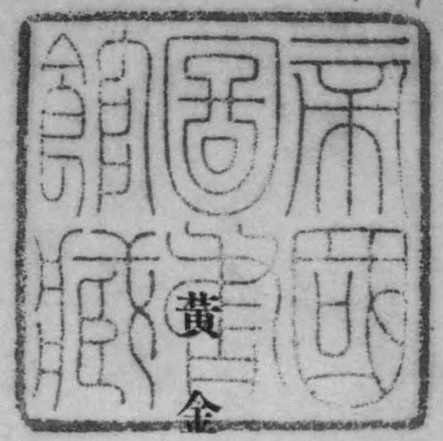
329
29

始

329-29



黄金の林

大正
5. 2. 22
内交

獨歩社は自由の國であつた。何人にも自由の發言權もあれば、仕事の上には如何なる自由活動も許るされてゐた。その自由の國の中で、皆な出來る限りを盡くして共に考へ、共に憂ひ共に戰つてゐた。實をいへば私達は「社員」といふやうな心持で仕事をしてゐるのではなかつた。友人の團體に假りに「社」といふ名前を付けたものに過ぎなかつた。極めて眞面目にまた極めて呑氣に働いてゐた。國木田さんの「親と子」は獨歩社の前身近事畫報時代に國木田さんが近事畫報に書かれたものであつた。夫人の「破産」

は獨歩社の成立から終局までの大體を、國木田さんの生前に夫人が書かれたものであつた。此度集めて一冊にするに付いて、小杉君が畫をかいて、私に何か一言付け加へよとの事であつた。集の名の「黄金の林」は「親と子」の中にある畫家の畫題から採つたのだそうだ。此集を見るにつけ、一層當時の自由の國が思ひ出され統率者の高い高い眞の人格を深く忍ばずには居られない。思ふ所は多いが、今私はこれ以上言ふことばを知らないのだ。

吉江孤雁

黄金の林

國木田獨歩

親子（上）

年頃四十あまりの、小ざつぱりした衣装の女、東京市内は山の手の奥、竹藪多き某町を住まつてゐるらしい。

あちらこちらと、四邊をきよろ〳〵見廻はすは、探す家の向ふから來た老人に、『このあたりに芝田之助様といふ方は御座いますか

畫をかく方ですが』と尋ねた。

『芝田之助樣と』と老人は小首を傾げて、『如何も存じませんな。此の先に酒屋がありますから其處で聞いて御覽なさい』と言ひ捨てゝ去つて了つた。

婦人は成程と氣附き、早足で半丁餘り北へ後もどりして、角店になつて居る三河屋といふ酒屋の前に立ち、其處に小僧の居るを幸と『一寸とお尋ねします、此邊に芝といふ名字で畫をかく人の家は御座いますまいか、此邊は少しも慣れませんから探しあぐんで居るので御座いますが』

小僧は顯を突き出した。『何丁目です』と無愛想に言ふ。

『サア其れが可く解らないので御座いますが、たゞ何町とばかりで』と婦人は當惑の樣、これを見て帳場に座つて居た此屋の主人らしき男。

『丁目も番地も解らんでは知れ憎う御座いますが、事によると上嶋樣のお屋敷内かも知れません。一つお屋敷で家が七十軒もあります。其差配が此處から二つ目の横丁の角で御座いますから、其處で聞いて御覽なさい、同番地ですから差配に聞けば解るでせう』と親切に敎えてくれたので、婦人は禮を言ひ、二つ目の横町の角を忘れんやうにと口の内で繰り返し店先を立ち去つた。

此時日は既に西に落ちて夕風寒く身に泌めば、婦人は肩をすぼめてショールを強く引きしめるのである。

東といふ名字の上に二丁目十六番地差配と朱書にした瓦斯燈には最早燈

火が點いて寒さうな光を微に放つて居る。そして四邊近邊、宵ながら人影も見えない。

京橋から外には一年中出たこともないほどの婦人が、こんな淋しい場所へ來たので、我知らず身の周圍を見まはすも無理ならぬことだらう。『はばかりですが、お差配の中に芝田之助樣といふお家が御座いますまいか』と門の外から問ふ聲さえ、氣味惡さうである。暫らくすると內で、

『下等の三號じやないか』と言ふのが女の聲、夫に續いて、

『谷口さんの隣りだらう』と男の聲で言ふのが外に聞えた。間もなく內から大きな聲で、『こゝから眞直に一丁ばかり行くと、野村と書いた瓦斯が出て居る家があります。それについて廻ると三軒目の家が芝樣です』と怒鳴るやうに言つた。婦人は敎へらるゝまゝに早足で歩いた。

『のむら』と假名で書いた瓦斯が出て居る家を見つけた時は、最早しめたと婦人は胸を擦つたのである。三軒目の家は直ぐ解つた。

內はひつそりとして人氣もなさゝうな、見るからして哀れな棟割長屋の前に立つた時は思はず足がすくみ、眼には涙の湧くばかり。氣を取り直して、

『もし〳〵、芝樣は御宅で御座いますか』と小さな聲でおとなふた。內から障子が開くや、洋燈の火影さつと射し、內庭に立つ婦人の顏をまともに照した。

『りさじやないか、まアお前如何して來たの』と內なる人は思はず聲を上

げた。見れば年頃二十一二、頭に束ねた髪の亂れよりも先づ目につく其衣此寒空に袷一衣、ひつかけし半纏の袖口からは綿が見えるのである。りさは暫く口もきゝ得ない。この時小兒の泣く聲と共に、男の優しい聲で、

『繁が泣くよ』と次の間で呼んだのは此家の主人らしい。年若き母親は直ぐ起つて内に入つたが、間もなく取れば三つになる乳飲兒を抱いて出で、

『りさ、まアお上りな、其處じや話も出來ないから』と言はれて、りさも座に通れば、此處は三疊敷の疊黒く、壁落ち、坐はるも氣味惡げであるのを、顔にも出さず、あらためて慇懃に手を突き、

『畫間の明い中に早く上る積りで參りましたが、何分お宅が知れませんので、まご〳〵して居る中に日が暮れて遲くなつて失禮致しました。旦那様にもお嬢様にもお變りも御座いませんか』と言はれて、答へるよりも問ひたきは父母の安否である。女主人は、

『暗くなつて尚ほ探し惡かつたらう、でもまア可く訪ねておくれだつた。あれから私共は變りもないが、毎日々々氣にして居るのは父様や母様のことばかり、父様も最早お歳だから此寒さに中られでもなさるまいかと、それば かりを苦にして居るのよ』と言ふ中にも涙聲。りさも涙を拭ひながら

『きのふけふと思ふうち、お嬢様がお宅をお出になりましてから最早三年になります、から、大旦那様のお弱りなさるのも無理は御座いません、このごろの御氣子では此冬が如何だらうかと御宅では皆な心配なすつてお居でになります。それで御座いますから、出來ますことなら、父様の御存命中

一度園子に會したいと母様は此頃それば
になりますのを、私もお傍に見て居て辛いばかりか、私とても同じ心持で
御座います。私の膝でお育て申せば我兒も同じお孃様で御座いますもの。
如何にかして、一度大旦那様のお口から園に會ひたいと言つて戴かうと、
何かにつけてはお孃様やお孫様のお噂を致しますと、初の中は顔を振つて
折り〳〵は私の顔を睨んでお留めになりましたが、此頃ではたゞ眼をしば
たゝいて横をお向になるばかり、其後様子を見て私が何で泣かずに居られ
ませう。お孃様、りさは眞實に袖を嚙んで突伏しては堪えて居ました。と
ころが昨日のことで御座います。夕日が縁側の水仙に射して居るのをガラ
ス越しに見てお居でになりましたが、りさや、園は今でも水仙が好きだら

うかとのお言葉で御座います。私もこゝぞと、お孃様もお可愛さうに今で
は水仙どころじや御座いますまい』と申し上げましたら、
『公然と會ふ譯には迚てもゆかぬが、何とかして今の中、顔でも見せてや
りたいものだと、被仰いました。サアメたと、私はそれでは明晩にも一寸
お連れ申しませうと申上げると、お前の宜ゝやうにしてくれとのお言葉で
御座いました。如何で御座いませう、お孃様これから直ぐにお出かけにな
るわけには參りますまいか』と乳母の長物語。園は初めより頭も得あげず
泣きながら聞いて居たがさて、何と返事を仕て可いか解らぬのである。直
ぐにも行きたいは山々なれど、所夫が如何いふか、若し行くことはならぬ
と言はるれば、それきりで濟うか、りさの親切も無になるばかりか、父様

も尙ほ片意地になつて、それなら死んでも會はぬと被仰るのは定つたことそれならば所夫が可し直ぐに行けと許して下さるか、それは先づ望のないことゝ兼てのお言葉でも解る話、多分襖子一重でりさの言ふのを聞いて立腹つて居らるゝかも知れぬ。さて如何したら可いものかと、暫時は言葉もなく、頭を垂れたまゝ考へて居る。その様子をりさも見て默つて居ると、次の間から、

『園！』と鋭き一聲『園！一寸此處へ！』

芝田之助は年若き畫家である。彼は貧苦の中に育ちながらも、父の腕を續ぎ母の心を享け、天性豪毅なるが上にも非凡の技倆を持つて居るのである。

未だ美術學校に通つて居る頃、ふとしたことから大宮園子と相知つた。園子は容貌の秀麗なるばかりか。心情の美しきに、田之助は深くも戀したのである。戀の道行は別に變りもなく、何時か二人とも相傾倒し、終生離るまじき誓を立てた。それを園子の父なる大宮剛三が知つて甚く怒つて、二人を野合でもしたかの如く罵つたのである。

それで田之助は無論、園子も最後の決心を固め、假令父母が如何に反對しやうと。斷じて二人の誓を破らないと。田之助は剛三に向つて斯ういふ意味の手紙を送つた——

二人は決して野合したのではない。二人は相愛したのである。相愛するのが罪だらうか。世には愛しない妻がある。夫がある。それは夫妻なるが

故に罪でなく、吾々は相愛しても尚且つ未だ夫妻ならぬが故に罪だといふ理屈が如何して立つ。

自分は取るにも足らぬ一小美術家だ。第一それが貴殿のお氣に入らぬのであらう。若し自分が伯爵の若様か何かであつたら。大宮銀行頭取なる足下は野合呼はりは仕ないのだらう。手短に言へば貴殿は吾人に向つて野合呼はりをする權利はないのである。貴殿は品行力正、未だ曾て一夫一婦の大義を破つたことのない君子人だと世間何人が許すだらうか。自分は自分の品行を吹聴するのではないが、若し貴殿が自分從來の品行中、一點不潔な事があつたと證明するなら、直に此問題は貴殿の命のまゝ處置して見せる。

こんな激烈な手紙を受取つて、人の親たる者、何で怒らずに居られう。剛三は眞赤になつて憤怒した。そして斯いふ宣言した。二人の行動の善惡は最早言はぬ、我が存命中、斷じて芝田之助なる生意氣な無禮者には我娘を許さぬ。園子は我子である。我は園子の上に親權を行ふて一歩も假釋しないと。

色々仲裁者が入つたが、二人とも如何しても下らない。けれども結極、田之助から謝罪することになり、剛三に向つて無禮を詫た手紙を出した。處が剛三はそれを突返した。

今度は田之助が承知しない。斷然園子に向つて家を出ることを求めた。園子は一夜泣き明したが、思ひ切つて大宮の家を出て芝田之助の許に投じ

たのである。

剛三は家族に宣告して、若し園子と消息するものがあれば何人と雖も直に大宮の家を追出すと、母親と乳母のりさは、泣きに泣いたが、如何ともすることが出來なかつた。

田之助と園子は小かなる一家を持ち、貧苦の中に生活しながらも先づ其日を樂しく送つて居たのである。たゞ園子の心の底には一點融く可らざる悲痛があつた。其中に二人の中に玉の如き男兒が生れこれを繁と命じた。

りさは母親の命で人知れず園子を二回ほど訪ふたから繁の出産は内々大宮家の者は知つて居たのである。

（下）

『園！一寸こゝへ』と言はれて、りさも思はず顔をあげ、二人は顔を見合はしたのである。りさが何か言はんとするを眼にて制め、園子は靜かに起つて次の間に入つた。

田之助は机に向つて書見をして居た身體を此方に向きかへ、正座して園子の入り來るを待つて居るのである。園子は默つて其前に坐つた。繁は乳房を加へてすや〳〵と眠つて居る。

『園、りさは何しに來たのだと、問はれて園子暫時は繁の寢顔を見つめしまゝ默つて居たが、思ひきつて、

『父から一寸と會ひに來てくれと迎へによこしたので御座います』

『お前、會にゆく積りか』

『父も病氣といふことですから、一寸會ひたいと思ひます』

『ウン、それじゃア會ふが可いだらう、けれど大宮園子でゆくが可いぞ、芝園子なら不承知たぞ。私は内證で自分の妻を何人にも會はすことは出來ないから其積りで決心したが可からう』

言ひ放たれて園子は首を垂れたまゝ身動きも爲ないのである。

『如何だ、如何決心した。』と問ひつめられ、

『それでは如何なつてもお許がないのですか』

『勿論、許たくも許す道理がない』

『何故ですか』

『何故だと？お前にはそれが解らんか。お前は私の妻だぞ、其妻に私へは内證で遇ひたいといふ人があるなら、それが誰であらうと私に許すことが出來るか、出來ないか考へて見ろ！』

『解りました。よく解りました。私が悪う御座りました。そう言つてりさを歸へしませう』といふ園子の眼は一ぱいの涙である。

『それではりさに言ふが可い、若し大宮剛三さんが、私に手紙をよこして會ひたいから一寸、お前の妻をよこしてくれないかと公然申し込んで來るなら直ぐにでも出しますと私が言つたと、そう歸宅つて言へつて。りさも遠い所を氣の毒であつたが仕方がない。』

園子は起つて玄關に出ると、りさは突伏して袖を嚙んで泣いて居るので

ある。園子は傍にすり寄り、耳に口をつけて、

『お前も聞いたらう。所夫のが被仰ることは無理のないのだから。私も如何することも出來ない。私も覺悟を決めて居るから最早父様に會ひたくない。歸つたらそう言つてお呉れ、芝田之助の妻は、田之助の許がなくてはお呉れ』

一足も外へは出ませんと。そう言つて

『お嬢様！私は何も申しません。隨分お達者に……』りさは嗚咽で言ふことが出來ないのである。園子も半ばむせび、

『お前も達者にね……そして、父様を賴みますよ、ごうか私に代つてね……母様も賴みますよ……』

りさは園子の手を執つて泣き泣くを園子はよう〳〵なだめて外に送りだ

した。

園子は健氣にりさを追ひかへしたものゝ其夜は勿論、翌日も心ひきたゝず、所夫と交す言葉も自から少く、朝よりふさいで居るので田之助も亦た面白くない。頗る面白くない。

であるから畫餉を濟すと間もなく、畫版を肩にかけて飛び出した。園子は何處へとも問はなかつたのは、前以て其場所を知つて居たからである。

冬の空晴れ、日はうらゝかに照つて居るが、空氣は何となく霞んで、遠くは赤味を帶びたもやが立こめて居た。斯いふ日には風がないから、さまで寒くはない、のみならず歩いて居ると熱くなる位である。健脚の田之助は汗ばむほど急いで目的地に達し、兼ねて定めて置いた位置から寫生に取

りかゝらうとしたが、さて如何も氣がひきたゝない。それで唯だ周邊をぶら〳〵歩いて居る内、ふと思ひついた場所があるので、御苦勞にも更らに健脚を鼓して三錢で濟むところをどし〳〵歩いた。ゆき〳〵て高臺に出ると、冬の日脚短く、此時は既に西に傾いた日が左手の林の上に赤く懸つて居る、右は林の缺けた處から廣い景色が見え、遠くは靄でどんよりして居る。田之助も一本路を眞直にどし〳〵歩いて、汽車の線路を一つ越えて、直ぐ右を見ると、四十間か五十間も離れた向に一座の林がある。此林の夕陽を正面にうけて居る樣が氣に入たので直に寫生に取りかゝつた。橋の袴に座を構えて。

林の中央に大木がある。これを圍んで落葉樹が叢生つて居る。此落葉樹の中には背の高い槻も雜つて居る。葉の未だ梢を離れざるは眞黄色に染つて居るので、日を受けて煌く樣はさながら黄金の光である。

心に不安の思あれど。一度畫筆を執れば田之助の精神は全く畫幅と眞景の中の吸ひ取られて、最早や我もなく妻もなく、まして大宮剛三をや。利害得喪の念、愛着の情、頓に消滅し了れば、彼の心頭たゞ美の技術あるのみ。

四十分ばかり思はず經つた。中央の大木と、其左の樹五六本の根方まで書き了らぬ中に早や日はかげつてしまつたので、田之助は已を得ず筆を止めた。そして彼は此畫を落成る爲め尚ほ四五回、此處に來る決心をした。

落成て後、何と畫題を命ずべき、これが又た畫家の苦心なり、樂みなり

である。それよ、黄金の林！俗なれども彼は善しと思つた。

其所で彼は歸途に就いた。宅に歸つたのは五時過ぎて居た。

『お歸りなさいまし』と例の如くしとやかに挨拶はしたものゝ顏色はやはり沈んで居るので、田之助も何時もの如く、元氣よく今日の寫生の模樣を話すことが出來なかつた。

それから夕飯が濟むと、お園は臺所でかたづけものをして働いて居たが其間、田之助は繁を膝にのせて遊ばして居たのである。

愛らしい盛の繁は、父にあやされ、初の內はにこにこと笑つて餘念なく遊んで居たが、いつか疲れると今度は、母を慕つて泣きだしたので、園子は手をふきふき座敷に入つて來て、

『よし〳〵、そう泣かんでも……坊や如何したの、父様に抱こして遊ばして、戴いたの、そう』とまだろくに口もきゝ得ぬ小兒と一人問答して、繁を抱きとつた。

ところが繁は如何したのか、容易に泣き止まないので、園子は抱いたまゝ縁先に出て、兒守歌をうたひながら、縁を彼方此方と歩いて眠らさうとした。

繁は眠りさうにもしない、矢張り泣いて居る。園子は低き聲に調をつけて兒守歌を唄つて居た。

田之助は座敷に居て火鉢を擁したまゝ聞くともなく、これを聞いて居た暫くすると、田之助の頰を一滴二滴の涙が傳ふのであつた。

彼はこれまでと雖も、月日のたつにつれて園子の父母を懐はぬでない。彼は幼少の時に父母に離れて孤兒の生涯を送り、世を情けなく送つて來たので、心の底には人並すぐれし情愛の泉を堪えて居ながらも亦た頑執なる性をも何時の間にか養なひ居たれば、園子の父に對しても一途に憤恨を懐いて居たのである。けれども我兒の生育つにつれ、我が愛の兒の上に加はりゆくに連れ、園子の父の心をも想ひやるやうになつたのである。されば りさを追ひかへしたを一には心地よしと思ふ傍ら、一には淺ましいと感じて居たのである。其矢さき、宵闇淋しき緣邊にて園子が繁を抱き、節哀れなる歌うたふを聞いては、我知らず熱涙の湧きいづるを禁じ得なかつたのである。

『園！』と田之助は優しく呼んだ。園子は座につき所夫の顔を見て驚いた。

『園、お前はこれから京橋へ行つて父上に會つて來たら可からう。私もお宅の傍まで送つてやるから』

園子は更に驚いて口を開き得ない。

『斯う言へばお前も驚くだらうが、私はつく〴〵感じた、私共が繁を可愛がるのも大宮さんがお前を思ふのも親の情は同じことだと、解りきつた事だが、其を私は今つく〴〵感じたのだ。』それで私が手紙を書くからそれを持つてお前は父上に會つて來るが可からう』

言はれて園子は先だつ涙を拭ひもあへず、『有難う御座います』と直ぐに仕度に懸つた、其暇に田之助手紙をすら〳〵と認め了り、妻は兒を背負ひ

夫婦は京橋さして家を出た。

大宮家の門近くまで來るや、園子は手紙を受取り、田之助は新橋附近の友の家にて歸りを待ち合はすことにし、二人は別れた。

突然の事で大宮の老父母は勿論、りさも驚きもし喜びもし、園子のみすぼらしき衣裝なご眼にも止まらず、直ぐに父が病床に導いた。

『園か。』と老父は一言。『お父様、お久しう御座いました。』と園子は僅に言ひ得たるのみ、一座は泣き伏して了つた。

芝田之助より大宮剛三に送つた手紙の文言は、『吾等夫婦が繋を思ふも、貴殿御夫婦の園子を思ひ給ふも親子の情に變りあらんや。ゆる〳〵お遇ひ被下度候』とのみ、されご老父は讀み了ると直ぐに、

『田之助様は宅か』と尋ねた。

『御近處で私の歸りを待つて居ます』

『直ぐ呼びにやれ、大宮が是非お目に懸り度いと言つたと』

大宮剛三は田之助の手を執り、園子の母は繋を抱き上げ、情の涙にあらゆる我執は流れ去られた。

『黄金の林』が落成るや、先づ老父の枕頭にかゝげられた。

破産

代理

國木田治子

『西尾さんは居らつしやいますか』と常子は某通信社の受付のガラス戸を開けて、見知り越しの受付の老爺に此様言つてきくと。

『一寸、待つて下さい』老爺は奥へ行つたが、直ぐ出て來て、

『如何ぞ此方へ』と常子を副社長が事務を取つて居る室へ案内する副社長の西尾は嫣然に常子を迎へた。

『先日はお邪魔を致しました。昨日お伺ひしましたら、お出掛がなかつたさうで』

『や、其れは失禮しました、マ、お掛なさい』と西尾は常子に椅子を進めた。

『ハ、有難たう存ます、暑う御座いますこと』と常子は進められた、椅子に腰を掛てハンカチで汗ばんだ顔を拭いて、ホツと微に溜息をついた。

『非常に暑いですね——御主人は如何です』

『ハイ、有難たう存ます、矢張悪う御座いまして困ります』

『醫師は何と言ふのです』

『咽喉が大變悪う御座いまして、其の爲に熱が出るのだらう、との事で何

しろ毎日三十九度位の熱が出ますので』

『そりや困りますな――、酒や煙草…』

『此頃は少しも戴きません、夫のがさう言ふ風で、外出が出來ませんから私が代りに來つたので御座いますが』

『例の事を何んとか早く片を付けて置きたいと思つて、手紙を上たのです』

と西尾は言葉を斷つて給仕を呼んだ。

『田中さんに、一寸入しつて下さい』と言ひ付ける、と暫して社長の田中が此の室へ入つて來た。

『此の方が岡村さんの奥さんで』と西尾は社長に常子を紹介をする、常子も立つて田中に挨拶をする。

『ア、其うですか、例の件でお出下さつたのですね』と社長は忙はしなくはき〳〵した口のきゝやうをする。

『ハイ』

『奥さんに解るのかね君』社長は西尾の方を見る。西尾は只首肯いた。

『じやお話しするが、例の廣告料の事ですが彼れは實に困りましたな――』

『眞實に種々御迷惑を掛まして、申譯が御座いません』

『西尾君が、マア暫く自分に委せて置いてくれろと言つたものだから、其の儘にして居た處が遂々否ないんでね――』

『眞實に間へ入つて下さつた西尾樣には眞にお氣の毒樣で』と常子は日常から西尾が自分の家の爲に、種々と心配して呉たのが、我家の不運から、

飛んでもない迷惑を掛て仕舞つたので、氣の毒で耐らなく思つて居たから、
又今更につく〴〵氣の毒で思はず西尾の顔を見た。
『外の債權者は如何しました』西尾は此の時常子に此う言つて訊いた。
『ハイ、津田も光榮社も家の事情を可く知つて居ますので、氣の毒がつて
別段喧ましい事も申しません』
『津田や光榮社つて君、何んだい』と社長は西尾に訊く。
『紙屋と印刷所なので御坐います』と常子は答へた。
『其處には何の位あるのです』と社長は聞いた。
『津田が二千圓以上、光榮社が六七百圓も御坐いましやう』
『家は何の位有るのだね、君』と此度は西尾に聞く。

『さうさ。千四五百圓ばかり有るだらう』
『フウン――、奥さん、千圓以上利益るのは大抵の事じやないのですよ。
新聞社へはちやんちやんと取次だ廣告料は直ぐ拂ふのですから、貴方の處
の社へお貸しゝただけの廣告料が戴だけなければ、其れだけは私の社の損
なのですからねエ、何んとか方法を付けて戴かなくつちや』と社長はきつ
と常子の顔を見た。
常子も社長の言葉を決して無理とは思はぬ處が、商業などには無經驗の
一個人に、千圓以上の廣告料を無言て數ヶ月間貸して置いて呉た、親切に
對しても迷惑を掛ては濟ないのだが、今の處社長が言ふ方法の付けやうが
絶對に無いので何んと答へて可いかと、當惑して暫くは言葉が出ない。

社長の田中は扇子をパチ〳〵やつて常子の答へを待つて居たが、容易に常子が返事をしないので、

『岡村君の病氣は如何なんだい、君』と西尾に話し掛ける。

『可くないのだ』

『それは不可んな、簡要の體が悪くつちや仕様がない、岡村君は今文界の流行兒なんだから、面白い本でも書いて、一ツ當りや僕の處の借金なんぞ直ぐに返せるのだからな』

『家ばかり取る譯にも行かんよ、外にも債權者が在るのだから』と西尾は笑ふ。

『それも、さうだな』と社長は眞面目。

二人の話を下向いて聞いて居た常子は此の時やつと顔を上げた。

『西尾様から家の事情はお聞き取りで御承知でも御坐いましやうが、岡村も永く病氣で居りますので、段々生活にさへ不自由して來る位で御坐いますから、今の處とてもこちらの社のお借を如何すると言ふ當てがないので御坐いますが』と常子は言ひにくさうに社長に言ふ。

『ウン』と社長は首肯いて腕を組むで暫く考へて居た。

『ジャ、此樣しましやう、拂へんものを無理にお拂ひ下さいと言つた處で仕方がないから、何れ拂ふと言ふ證文を書いて戴かう、そして神戸の弟さんに保證人に成つて戴きましやうよ』

と、社長は言つた。一つ逃がれて又一つ、弟を保證人にする事は、常子

夫婦にはとても出來ぬのであつた。

『弟を保證人にする事は到底も出來ないので御坐います、私の家の爲に弟は神戸の銀行からお金を借りましたのですが、私共で返さないものですから、新聞社の主筆と言つても少かの給料、其れが三月目には少からぬお金を銀行へ返して居て呉るので御坐いますから又此方の保證人に成つて呉とは、申し悪いので御坐います』

『銀行つて川崎銀行でしやう』

『はい』

『そんなら、弟さんが川崎さんに此方の事情を可く話したら、川崎さんから銀行の方は如何かして呉ますよ、そりや弟さんだつて可愛相だ』

『ほんとに氣の毒なので御坐います』

『けれど只保證人に成るだけなら、何んでもないでしやう、さうして決定を付けて仕舞ひましやう、ね、奥さん』

『ま、弟の方へ申して遣りましやう』と常子は心配相な顔付き。

『ダガ、マア岡村君、飛んだ事にひツかゝつて、中々一生容易な事じや、浮ぶ瀬が有りませんな、其の上體は壞して仕舞ふ、實にお氣の毒だ』と社長も岡村の身の上を心配してくれる。

『だから僕が度々忠告したんだが、先生中々聞かんもんだから』と西尾も嘆息した。二人の言葉を聞いた常子は樣々の思ひが、今更の樣に胸に突上げて來て言葉が出ないで下向いてしまつた。

『總體で如何位の損なのです』と社長は云ふ。

『一萬二三千圓だとの事だ』と西尾が言ふ。

『一年も立たん内に如何して、そんなに損をしたのだらう』と社長は驚く。

『それが、岡村君にも解らんのだ』

『そんな、馬鹿な事が有るもんか君』と社長はやつきとなる。

『何にしろ岡村君が彼んな事を始めるのが、間違つて居るのだ、殿様が商賣を始たやうなもんなのだよ、何も彼も番頭さんに委つきりなんだもの、其の又番頭さんと言ふのが、横から見ても縱から見ても、何處に一ツ信用の置けるやうな人ぢやないのを、馬鹿に信用してしまつて、周圍が見兼て忠告しても、世の中に惡黨なんていふものは決して無い、と岡村君が自覺して居る、自論で押し通して、只くうに千圓たりない、二千圓たりないと言はれる度に、岡村君は一生懸命に金を造へる方ばかりに、奔走して居たのだ、仕舞ひには金の出處が無くなつて仕舞ふ、整理は付いて居ず、とてもお話しにはならないのだよ』と西尾は嘆息した。

『目茶だなアー』と社長は呆れて居た。

『だが其の損の内には岡村君が遊んだのも、大分入つて居ると云ふぢやないか』と社長が云ふ言葉の下から、

『僕もさう聞いて居る』と西尾も云つた。

『マア、其れは僞で御坐います』と思はず常子は聲を高めた。

『貴方は知らないのですよ』と二人は常子の顔を見て笑ふ。

『イヱ、私可く知つて居ります、何時か何方かも其んな事をおつしやつた方が有りますが、夫のが心配事が重なるものですから、其れを忘れる爲に、一時お酒を戴き過ぎたものですから』

『晩酌が一升以上だつたと言ふ事ぢやありませんか』

『マ、其れも僞ですわ、其んなに飲むだら夫のは今頃死んでるかも知れませんわ』

『まさか』

『眞實で御坐いますわ、お酒の事は別として遊んだ事は眞實僞で御坐います、世間の噂は仕方が御坐いませんが、御迷惑を掛けたお二人樣だけでもせめて疑念を晴して戴かないと夫のが氣の毒で御坐います、三十日や、十四日に賣捌の主任の人が、賣上を集金て參りますと、私達は其のお金を一寸見たばかりで、直ぐ小僧に銀行へ持たせて遣て仕舞ひます、お拂ひをする處へは小切手や約手が出て居りますから、其れが皆んな落て仕舞ふまでは心配で、賣上だつて豫算通りには集金ませんのですもの、三四ケ月は皆樣にも如何やら此樣やら俸給も上げられましたが段々思ふやうに差上げられず、仕舞ひには皆樣が俸給なしに働いて下さいましたのですもの、其内で如何して夫のが遊ぶなんて、そんな事が出來ましやう、お友達に誘はれて四度か五度遊びに行つたこともありましたが、自分から遊びに行くなんて、そんな事は決して神樣に誓つて有りません、けれど私が此樣やつて一生懸命に言ひ譯を仕たつて、夫の非を隱すのが妻の役ですから、世間の其

れと一處にして、私の申す事を信用して下さらなければ其れまでゞ御坐います。』と常子は淋しく笑つた。常子の話を聞き終つた二人は、

『さうかな――』と吐息を突く。

處へ給仕が、

『田中さんへお客様』と知らせに來る。

『ヤ、失敬しました、何分よろしく西尾君と相談して下さい、岡村君にもよろしく』と社長は挨拶を仕て出て行つてしまつた。

『大變お邪魔を致しました』と常子も歸り仕度をすると、

『如何しまして、ジヤお歸りになつたら、岡村さんとも相談なさつて、證書の事は成るたけ早く願ひます。弟さんだつて兄さんの爲ですもの、御不承知は有りますまい』

『何と申しますか、早速云つて遣ります』

『併し僕等が今日岡村君が遊んだと、言つたなぎゝ貴方歸つて言つては否ませんよ、又岡村君如何なに立腹るか知れない、さうして病氣に障りでもすると大變だから』と西尾は何時も變らぬ親切の心添を、常子はつくゞく嬉しく思つた。

常子は通信社を出て、山下門外の堀際で電車の來るのを待つた、暫待つたが何處からも中々來ないので、柳の木の下の涼しい處へ立つた、時計を見ると十一時半、

『最早そろ〳〵夫のが熱の出る時分で、嘸苦しんで居るだらう』と常子は

思ふと、熱い涙が自然と目に浮ぶ、

『アヽ、遂々夫のは浮世の浪深く、巻き込まれて仕舞つたのだ』と常子は思はず絶望の吐息をついた。

決心

一年前の六月の末、五月雨の降り續いた或日の夕暮、常子の夫の岡村正夫は何時に無い苦しい顔をして家に歸つた。

『父ちやんのお歸り――』と喜んで飛び出して來た三人の子供は、一齊に父に嚙り付く、妻の常子は夫の顔を一目見て胸をついた、疳癪を破裂させられては大變と、主人を出迎へた、女中の房に目顔で知らせると、お房は主人の顔ばかり見て、はら〳〵して居たが、やつと氣が付いて、子供をだまして土藏の内へ遊びに連れて行く。

『梅ちやん、父ちやんがお歸りよ』と常子が呼ぶと、臺所で手傳て居た女學生の梅子は、紅たすきを掛けたまゝ何時もの樣に元氣よく、飛び出して來て、此れも主人の顔を見て吃驚して仕舞つて、何時になく、

『お歸りなさいまし』と丁寧に挨拶をする容子のをかしいので、主人も常子も思はず笑つた。

『アラ、ひどい』と梅子は體裁惡相に顏を紅らめて、大急で臺所へ引込む。

主人は洋服を和服に更へて、机の前に坐り、折カバンから何にか書類を澤山出して、机の上にひろげた、手早く洋服の始末をしてゐる常子に、主

人は、

『飯を早く』と催促する、

『ハイ、只今』と常子は急いで臺處へ行く、

『母さん、父さん今日は變ね』と梅子は小聲で呼やく、

『ヱ、』と常子は首肯きながら、膳立をする。

『恐いはね、私又た母さんが何にか叱られや仕ないかと、先程からビクビクして居たのよ』

『さう、有難たう、氣を付けましやう』

『最早、喰べるものは皆んな出來たのよ』

『さう、有難たう御飯の催促なのよ、早く持つて行きましやう』

『ジヤ、私追々後から運ぶから、貴嬢お膳だけ前へ持つて居らつしやいよ』と梅子は氣を揉む。

二人が心づかひに夕飯の膳は間もなく主人の前に持ちだされた。主人は常子の酌で二三杯續て酒を飲むで、扨、夢から醒た人の様にはつきりとなつて、常子と梅子の顔を見た、梅子は何時になく常子の蔭に少さくなつて坐つて居た、

『梅ちやん、先程は御丁寧な御挨拶が有つたね』と主人は笑つた。

『知らないわ、彼んな恐い顔をして人を狼狽かせて、其して二人で笑ふんですもの、母さんも無情いわ』と梅子は主人の機嫌が直つたので、此度は自分がむきになつて怒る。

『マア、何時ものやうに、最つと前へ出ちや如何です、大變な話が有るんだから』と主人は言ふ、

『エツ』と二人は顔見合せて驚ろいた。

『さう驚かないでも可い、が、マア可い事か悪い事か當て見ろ』と主人は杯を出す、常子は器械的に酌をして、夫の顔を凝然と見た。

『其りや可い事に決定て居るわ』と梅子は事もなげに言ふ。

『お前は』と主人は常子の答を促したが、

『サア、何方でしやう』と常子は容易に答へなかつた。

『言はうか』と主人は云ふ。

『エ、』

『何卒』と二人は答へた。

『此度、社の事業を僕が引受たのだ』と主人は力の有る聲で言ひ切つた。

主人が餘りに思ひ掛ぬ事を言つたので驚いたのは妻の常子。

『マア、貴方眞實で御坐いますか』と常子は凝と夫の顔を見詰めたが、見る〳〵憂の眉を顰めて、吐息をついた、妻の容子を見た主人は、

『譯も聞かずにしよげる奴が有るものか、馬鹿』

『けれど』と何にか言はうとする常子を、主人は遮つて、

『マア、己の言ふ事を聞け、お前は薄々聞いて知つてるだらうが、此度愈よ社が持ちきれなくなつたのだ、處が己れが擔當して居る畵報や、雜誌だけなれば、月に六百圓利益が有るのだ』

『眞實でしやうか、何人が其う言ましたの』

『先生さ』（先生とは岡村が世話に成つた先輩）

『先生がおつしやつたのなら、僞ぢやないでしやう』

『と、僕も信ずるのだ、處が社では六百圓位利益が有つても、色々の都合上仕様がないのだ、だから先輩は社の整理の付く間、我の社の畵報や雜誌を預つて、出版して呉る人は無いだらうか、と僕に相談が有つたのだ、其れから心當りへ相談した處が話しが纏らない、預かり人が無いと定まると先生が大變困るのだ、僕も今迄隨分先生にはお世話に成つて居るから、ぢや僕が預かりましやうと言つたのさ』

『マア、貴方も隨分向不見ずですね――』

『何故』

『だつて、六百圓利益が有るなんて事は、貴方が遣つて御覽に成つた上でなきや、實際の事は解らないぢや、有りませんか』

『さうさ、第一僕は利益の事などは思つちや居ない、僕等を始、編輯の諸君が飯を喰つて居られさいすりや、可いと思つて居るのだもの、其れも先生は半年ばかりの間だと仰しやるのだから、澤山間違つた處が僕が五六千圓も借金を脊負て引下がる位が落だらう』

『先生の爲に犧牲になるやうなものですわね』

『ウン、犧牲――、けれど犧牲と言ふ事は惡い事ぢや無いと、思ふな』と、主人は手酌で浪々杯に酒をついで、一息に飲む。

『そりや、悪い處か大變可い事だと私は思ひますが、私は此の間から此様な事を思つて居たのですよ、皆様のお話に社が永持は仕無いと言ふ事ですから、戰爭時分から貴方は一生懸命畵報の爲に心配をなさつたのだから、此れを機に郊外に引込んで、昔の呑氣な文士生活に歸らう、貴方に其れをお進め仕様、さうでも仕なければ、貴方のお體だつて耐らないと、思つて居ましたに』と常子はしみ〴〵、殘り惜し相に言ふ。

『僕もさう思つて居たのだ、が、可いぢやないか、又新しい方面で、浮世と戰ふのも面白いぜ、それで僕が體を惡くして死んだつて、定まる運命だ仕方がない』

『何んだか、心細いのですねエ』

『けれど商業なんて言ふものは、一ツ當ると大層な利益が有るものなんですよ、話し半分としても、三百圓位は必度利益が有ますわ』

と今迄無言て夫婦の話を聞いて居た、梅子は側から力を付ける。

『それにしても貴方、資本金が入用でしやう、其は如何なさるの』

と常子は心配相に聞いた。

『サア、其れで僕も今閉口して居るのだ、差當り此の月末に、如何しても千圓入用のだ、神戸へ行つて弟に相談すれば、千や二千如何にかして呉るだらうが、最早日がない』

『餘り急なのですものねエ。今日は二十四日ですわ』

『僕が行かなきや駄目なんだが、僕は行つてる暇がない、此方で今三百圓

は確實に出來る當が有るのだ』

『何人か貸して下さるのですか』

『松谷君と田口君とが都合して呉るのだ』

『お二人とも畵を書く方なんでしやう』

『さうだ』

『マア、御親切にねエ』

『梅ちやん、父親に貸りて來て呉ないか』

主人が偶と戯言を言ふと、梅子は笑ひながら返事もせず、暫無言つて考へて居たが、

『國へ歸つて父に賴むで見ましやうか』と稍あつて答へた梅子の顏には、

賴む所あるらしく、目は望の光に輝いて居た。

梅ちやん

梅子は伊豫の生れで、父は中々の遣手で一代のうちに相當の資産を造つた、其家の梅子は一人娘。父の氣質を受け次いだ梅子は、通常の娘などの中々及ばぬ、確固した、氣性を持つて居た。十八歳の時東京に出て寫眞術を研究した、氣性がさう言ふ風なので技術を覺るのも人より早く、十九歳の春の末、岡村が編輯して居る畵報に聘されて、畵報社の寫眞部を一人で擔當して居た、其の頃は未だ日露戰爭の終らうと、して居た頃なので、此處の歡迎會、彼處の園遊會、海軍省へ戰地から來た寫眞を複寫に行くと言

ふ風に、所々に寫眞を寫しに出かけるので、一時は畫報の女寫眞師と新聞記者中間なごの風評に上つて、隨分、評判が喧ましかつたが、生れ付き男らしい素氣ない態度は、悪い評判を立てられる元にはならず、何處へ行つても受が可いので、畫報社の爲には利益であつた。

其頃から梅子は岡村の家に世話に成つて居た、紫の袴をはいて寫眞機を肩に掛けて出掛ける時は畫報の社員、家へ歸れば家庭の人、親の側に居ると同樣な娘心で、岡村の總領娘で評判のやんちや者、(年は八歳)と本氣で喧嘩をして皆に笑はれて、

『だつても貞ちやんが、餘りなんですもの』と體裁が悪いやら、口惜やらで小供らしく泣いた事も有つた。

國元からは一人娘を何時までも、手放して置くのが心配ないのか歸國々々と言つて來るので、一年ばかりは畫報の爲に働いて居たが、とう〳〵社を辭して國元へは猶半年歸國の猶豫を父に願つて、國へ歸れば開業する心組で此の頃は一層技術を研究して居るのだつた。

明れば六月の二十四日、今日は何時にない上天氣。

主人の岡村は出掛に。

『ぢや梅ちやん、眞實に國へ行つて來るのですか』と梅子に聞いた。

『はい、今日の十二時の汽車で行つて參ります』と梅子ははつきり答へた。

『貴樣のお父樣にまで、御心配を掛るのは僕も實に忍びん處ですが、今の場合、貴樣の御心まかせにします、が他日必らずお報をする時があらうと

思ひます』

『父さん、そんな事を仰しやると、私お返事の仕様に困ります、只何んでもなく思つて居て戴だきましやう』

『否、さうぢやありません、じや道中を氣を付けてね、お常に可く言ひ付けて置きましたから、よく相談して下さい』と主人は出て行つた。

出て行くのを見送つた、梅子は自分の室に歸つて荷造を始めると、

『梅ちやん、何處へお引越しするの』と六歳に成る虎雄と言ふのが室へ入つて來た。

『梅ちやん、お國へ歸るの』と梅子は笑つて居た。

『何故、貞ちやんが虐めるから』

『イヽエ』

『汽車に乘つてくの』

『エヽ』

『僕も行きたいなア、僕汽車大好きだピーガッタン〳〵』と室中を走けて歩く。

『虎さん、靜かにして頂戴よ、梅ちやん目が廻はるわ、母さんは』

『ミドコウを背負て何處へ行つちやつた』

『さう何處へ行らしつたのだらう』

『僕は、知らないや』と虎雄は梅子が衣服を詰めた柳行李の上に飛び上がる。處へ常子は末の娘を背負つて、片手に大きな包を持つて此の室へ入來

つて來た。

『最早、梅ちやんお仕度は出來たの』と常子は座に付いた。

『ヱ、、一寸歸るのですから何んにも持つては行きませんわ』

『貴孃が突然、お歸りなさつたら嘸皆さんが吃驚なさるでしやうね』と常子が云ふと、

『そりや吃驚するでしやうよ、だから電報を打ずに行きますの』

『さうですわね電報を打つて先へ心配を掛けては悪う御坐いますわ、此れはねヱ、梅ちやんお耻かしい品ですけれど、母さんのお土産になさつて下さい、』と包の中から水引の掛つた反物と菓子の折を出した。

『アラ、母さん此樣事をなさつちや困るわ、必度此んな事をなさるだらうと思つて、お斷りしやうと思つてた内に、何處かに行つてお仕舞ひなさるのですもの、お氣の毒だわ』と梅子は氣の毒相に常子の顏を見た。

『アラ梅ちやん、此んなつまらぬ事で心配なさる事は無いわ、其れより貴孃は家の爲に飛んだ事を引受て下さつて』と常子に皆まで言はせず、梅子はさへぎつて。

『母さん、そんな事を大袈裟に心配なさらないでも可いのですよ、私が父に頼んで澤山の事は出來ませんでも、少しはお手助に成るやうにしますわ、私が父さんから受けた御恩返へしの積りで』と梅子は言つた。

『アラ、貴孃から御恩返しなどして戴くやうな事を、家ではしませんわ』

『否へ』と梅子は頭を振つて、

『私、岡村さんから大變御恩を受たと思ひます、岡村さんから始終爲に成るお話しばかり伺がつたので、心は私し全然生れ變つた積りなのですわ、私しの爲には岡村さんは心を直して下さつた先生ですもの、だから今度の事位ゐ何んでも有りませんわ』と梅子は事もなげに言つた。

『有難たう、けれどお父様だつて御都合がありましやうから、貴嬢決して無理な事を言つて父様を困らせては、惡う御坐いますよ』

『大丈夫ですよ』二人の話をまじ〳〵訊いて居た虎雄は、

『母ちやん、僕を置いてきぼりにして行つたね、サア、お留守居して居た御褒美をお呉れ』

と常子に嚙り付く。

『彼處のお戸棚にビスケットがあるから、房やに出してお貰ひなさい』

『ビスケットなんぞ、不味いや』と虎雄は惡まれ口を聞ながら茶の間の方へ走けて行く。

『今日、當地を出發と二十八日でなきや國へ着きません、其れから爲替で直ぐ送つても三十日の間には合ひませんから、父に話して直ぐ電報で送つてよこします』

『何卒ね、可いやうに願ひます』

『母さん眞實に心配なさらないが、よどざんすよ』

『ヱ、、有難たう、貴嬢も直ぐ歸京て來て頂戴』

『ヱ、、けれど少し位ゐお母さんのお乳を飲んで來ても可いでしやう』と

梅子は笑ふ。

『稀ですものね――、ぢや緩り早く、歸來て入らつしやい』

『困難かしいのね――』と梅子が笑ふ處へ、

『奥樣、車が來りました』と房が知らせに來た。

『ぢや行つて來ゐります、虎ちやん左樣なら貴方の頭位の夏蜜柑をお土産に持つて來て上げるわ』と梅子は晴やかに笑つて、

四谷の岡村の家を出發た。

家根裏會議

梅子が出發て行つた午後、主人の岡村は大急ぎで歸つて來て、

『今日、夕方から家で皆なが集合て相談をするのだから、僕の二階へ仕度をしてお呉』と言つた。

『マア、貴方は何時も出し抜に、色々な事を仰しやつて、私を吃驚させてばかり居らつしやるのですね』と常子は呆れた。

『お前は可く何んにでも吃驚する奴だな』

『でも今最早夕方ですわ、さうして彼の不潔二階で相談を成さるの』

『彼處は僕の書齋だ』

『じや私、釣りランプを買つて來ますわ、そして幾人入來つしやるのです』

『僕とも九人さ』

常子は大急で買物に出掛た、歸る途中で最早、お客樣に逢つた。

岡村の家は四谷の伊賀町で家の建方は土藏を中心に後は土藏の廻りに差掛を仕たと言ふやうな妙な家だつた。土藏は上下とも十二疊づゝ、疊が敷いて有る、下は住居にして居るが、二階は疊も新しく、明り取りも可いのだが、天上が張つてないので、天上裏の大きな梁が見えて上の方は畫でも薄暗い、女連は氣味を悪がつて、少とも上らないので可い座敷を遊ばせて置くのは無駄だ、僕の書齋にすると主人は言ひ出して、女連は重い書棚や机や額やら運ばせられて、一日掛りでやつと書齋らしくしたのはつい此の間の事であつた。

來る人も來る人も、

『此れが家根裏の書齋ですか』と笑ふ人も驚く人も感心する人もあつた。

主人は自分が一生懸命に書齋らしくしたので、『家根裏の書齋も妙だらう』と大得意。

今夜のお客様の第一は、畵伯の三人づれ、翁と呼ばれる松谷さん、勉強家の田口さん、やんちやな杉さん、一足違ひで今度は四人づれ、編輯の連中から父親と言はれる溫順な吉元さんを始め、口の悪い杉さんから仇名を庄屋様の若旦那と付けられた、江木さん、女學校の校長様然とした鶴見さん、竹原さんと言ふ人は、常子が大嫌ひな人、此の人を知つて居る限りの人で、此の人の事を悪くこそ言へ、決して可く言ふ人は一人もなかつた。

岡村も竹原の爲人を可く知つて居るくせに、何時も一生懸命に庇護ふのを常子は心配して。

『貴方が何位竹原さんをかばつて上げても、自分の都合で何時また貴方が迷惑をする様な事を仕出かさないとも限りません』と幾度常子が心付けても、其度に。

『女が何にを知るものか』と叱られるばかり昨夜も此度の事業に竹原も入つて居ると夫に聞いた常子は、亦今更の様に驚いた。

『お前は始終竹原の事を心配して居るが、心の内は知らず、今の處僕の爲めに働いて居るのだから、其んなに心配せんでも可いと思ふが併し後來僕の事業の障害と成るのは、竹原だと思ふ、けれど悪には自然悪の報が有るだらう、僕等は竹原に騙されたと言ふ事は、僕等の恥では無いからなア』と岡村は言つた。が何ぞ知らん竹原が表面岡村の盡力をして居ると見せて陰に廻つて岡村の事業を今現に奪はうと仕て居た事を知る者は無かつた。

岡村の話聲と杉さんの元氣な高笑ひが、下座敷に際立つて聞へた。

『旦那様は一人で彼んなにお話しを成さつて可くお疲勞なさいませんね』と何時もながら女中の房は主人の岡村が、一人で喋るのに感心して居た。

『眞實だねエ、私達が彼んな大きな聲を出して、一時間も二時間も喋つて御覽、聲が嗄れて仕舞ふよ』と小供を寢かし付けて居た常子もしみ〴〵言つた。

軈て小供を寢かし付けて仕舞つた、常子も二階へ茶の給仕に上がつた。

『尾田君は如何したんだらうなア』竹原が言つた。

尾田と言ふのは先生と同國の者で、畵報社の會計を手傳つて居たのを、

岡村が事業を引受るに付いて、其の人に會計の事を頼んだのだつた。

『眞實に如何したか知らん』と主人も待遠し相だつた。

『吉元君、君は家を探すと言つてたが、見付かつたかね』と又竹原は吉元へ話し掛ける。

『ウン、見付かつたよ』と吉元は靜かに答へた。

『何處ですか、吉元さん』常子が聞くと、

『岡村君が、住まつてた元の家、櫻田本郷町の』と吉元は打つきら棒な返事の仕様、常子は吉元の言葉を聞きつけて居るので、

『ア、、其うですか、けれど彼處では狹か無いでしやうか』

『二軒、開いてゐる、岡村さんなら貸すと言つた』と言ふ吉元の顏を竹原はまどろッこし相な顏付きで見て居た。

『彼處が二軒借りらるれば、角の方へ私達が住まつて、堀端に入口の有る方の家を、二階を編輯、下を事務を取ると言ふやうにすれば大變都合が、可う御座いますわね』と常子が言ふと、

『彼處は畵報社の發生の家だから、可いだらう』と主人も贊成した。

櫻田本郷町の家と言ふのは、下は岡村の家族が住まつて、二階の十疊一室が始め畵報社の編輯所であつたのだ、其頃は岡村が一人の助手を使つて遣つて居たのが、口露戰爭に成つてからは、社員が增たので、十疊一室では狹くつて仕樣がないので、直ぐ近處の兼房町の廣い家に轉居のだ、其處の家にも岡村の家族は住まつて居た、永い間岡村の一家族は編輯所と一處

で有つたが、何位氣を付けてもやんちやな小供達は、何時の間にか二階の編輯へあばれ込んで、皆なを困らせる、又た家族の者も家の用と社員の使に頼まれるとか、お茶を出せ、火鉢に火がないと、少しも氣の休まる間が無いので、今年の四月、編輯は京橋の店の二階、岡村の一家は四谷と別居したのであつた。

『それは可い、岡村君の住居と店と離れて居ては困るからなア』と誰かゞ言ふ。

『そうだとも』と皆なも聲を揃へて同意した。

岡村の無性は何人も知つて居るから、店と住居とが一つ處だと言ふので、皆なも喜ぶ。

『ちや、お常明日行て決定てお出で』と主人も言ふ。處へ房がお客様と尾田を案内して來た。

尾田と言ふのは年頃二十七八でハイカラ仕立の洋服姿、手には寶石入の指輪さへ穿て居た、常子は尾田と言ふのを一目見て、

『夫は此の人に大切な會計を委すのかしら』と何んとなく心もとなく思つた。

轉居

常子が朝早くから外出の仕度を仕て居るのを見た主人は、

『芝へ行くのか』と聞ゐた。

『ハイ、貴方もお出掛でしやう、其處まで御一處に行きましやう。れんちやん兄さんに洋服を着せて上げて頂戴』と常子は宿りに來て居る妹に頼む。

三人のやんちや者を妹と、房やとに頼むで夫婦は家を出掛けた。

出合ひがしらに郵便脚夫が入つて來て、はがきを一枚常子に渡して行つた。

主人は、はがきを讀み終ると、

『實に怪しからん』と言つてはがきを見つめて居た。

『何處から來ましたの』と常子もはがきを覗き込んだ。

拝啓、當方にも都合有之候間御發表は今暫くお見合せ願上候早々

と讀んだ、差出人は先生と常子は肯首いた。

『今になつて又此んな事を言つて、お遣しなさるなんて如何したのでしやう』と常子は、氣遣はし相に夫の顔を見た。

『如何したんかなア』と主人は投げるやうに言つて、はがきを常子に渡した。常子ははがきを小さく折つて帶の間へ仕舞つてしまつた、主人は片手はステツキ、片手は髪を引つぱつて、凝然と俯向いて暫く何にか考へて居たが、

『可し』と主人は稍やあつて顔を上げた。

『己は此れから先生の處へ行つて可く確めて來る、事に由つたら斷然斷わつて仕舞ふ。此方は此方で相當の苦心がある、向の都合の可いやうにばかりする譯にはいかん』と言つた主人の目には怒りの色の有るのを常子は見

留て、心を痛めた。

『さう言ふ容子では、家も決定る譯には行きませんはね』と常子は夫の顏色を伺ひながら恐る〳〵聞くと、

『さうさ、けれど見るだけ、見て置いたら可いだらう、其うして今日晝頃に京橋の店に、電話を掛けたら可い、今から先生に會合て、斷るとか、引受るとか何つちかに決定て來るから』

『ぢや其うしましやう』と二人は歩き出した。連れ立つて歩いても、何時もは可く話し掛ける主人が、今日は無言で前へ立つてスタ〳〵歩るく、常子は後を追ふやうにして、やつと四谷見附迄來て、外堀線の電車に乘つた。

『貴方、若し先生にお斷わりするやうな事に成つても、先生がお心持が悪くなさらないやうにね』と常子は夫に呟くと、主人は常子の顏を一寸見たが、只肯首いたばかりで口も聞かない。常子も亦自分の言ふ事が夫の氣に觸つては大變と、無言つて仕舞つた。

電車は赤坂を通つて琴平前へ出て、此度は丸の内へ入つた、五二館前で電車は止まつた。

『ぢや、私行つて來ゐります』と常子は言つて立上がつた。

『家を見たら、直ぐお歸り小供があばれて皆なを困らせてるだらう』と夫は始めて口を開いた。

『ハイ、直ぐ歸ります』と常子は電車を下り、堀の直ぐむかふに見える、元自分が住んだ家を見ると。

『アヽ、亦町住居をするのか』と思つて喪膽りした。

岡村は先生と會合た結果、いよ〳〵引受る事に決定つたので、亦家を急に決定に常子は出掛る、家の持主との話しも都合好く付て、今日は編輯と店が轉居て來ると言ふので、常子は朝から總領娘の貞子を連て、本郷町の家へ出張つて來た。家は永くあいてたと見えて塵埃だらけだつた。

此れは大變と、常子は驚いて、永い親善の近處の車屋の主人を賴むで來て、大掃除を始めた。

『奥さん處が遠方へお轉居に成つたので、私の處はおほきに米櫃に差響いたのですよ、又今迄通りに願ひます』と老爺はそろ〳〵話しを始める、常子は好い加減に返事をして、さッさと掃除を仕て居た。

處へ荷物を運び込んで來た。

荷物と言た處で、札が十個ばかりと古い用箪笥が一ッ、寫眞種板を入て置く不器用に出來た本箱のやうなものが二個、原稿入の支那カバンが一ッ後は西洋雜誌の古いのや、參考の爲に保存して有る古新聞、此れだけは常子が見慣て居る、編輯の道具。

『店の道具は來ないの』と荷物に着いて來た小僧に聞くと。

『御坐いますよ』と小僧は笑つた。笑ふ筈帳場格子が二ッと、背負葛籠が一ッ。

『此れつきりなの』と常子は呆れる。

小僧と老爺に荷物を二階へ運ばして居る處へ、岡村を始め編輯の連中が

繰込んで來た。

『ア――、自分の宅へ歸つたやうな氣がする』と無口な吉元さんは言つた。

『サア、一働きやらうぢやないか』と竹原は先に立つて、其處いらを片付け始めた。荷物が少ないので直ぐ片付いて仕舞ふと、

『奥様、開業のお祝に何にか御馳走に成りたいものでんねエ』と竹原は言つた。

『今お蕎麥を申して遣りました』と常子は答へた。

『お蕎麥結構』と此度は下へおりて、小僧に何にか連りに差圖を仕て居る、常子は竹原の差出がましい處置を見る度に何んとなく嫌な感じがした。

注文の蕎麥が來たので、皆んな集合て喰始める。

『此れからは僕達の世界だ、諸君、一生懸命に遣うなア』と岡村は言つた。

『無論』と鶴見は重々しい言葉で答へる。

『大いに遣りましやう』とおとなしい江木が誠心の籠つた返事、二人の容子を見た夫婦は頼もしい人達だと、心から嬉しく思つた。

『店から先生にお目に掛りたいと、言つて來ました』と小僧が二階へ上つて來て取り次ぐ。

『何人か來らしつたのだらう』と常子が出迎へる程もなく、畫報社の重役の一人と番頭が上つて來た。

『ヤ、お目出度』と二人は轉居の祝ひを言ふ。

『有難たう、士族の商法なんですから、何分お心副を願ひます』と岡村は

言ふ。

『私達だつて眞實の商賣人じやヤア無いのですからなア、時に私達は畫報からお使ひに來たのです』と番頭は言ふ。

『何んのお使ですか』

『今日當方へお持ちに成つた品物の、預かり書を戴きに來たのです』と重役は答へた。

『君、此樣な、がらくた道具の預り書が入用のかへ』と岡村は言ふ。

『私達もさう思ふのですが、社長が共う言ふものだから』と番頭も頭を搔く。

『社長つて、彼の豚が言ふのかへ』と岡村は言ふ。

『先生相違ず口が惡いなア』と重役は苦笑ひする。

『だつて豚のやうじやないか、竹原君、君品物を調べて預かり書を書いてあげ玉へ、併し寫眞の種板の勘定などを、今させられては耐らんな』

『否、可い如減で可ろしいのです』と番頭は言ふ。

『可し來た』と竹原は筆と紙とを持つて立上がつた。其時、

『尾田は今日店に居ないやうだつたが、何處へ行つたのか君知らんかね』と岡村は番頭に聞いた。

『今出て來る時居たようでした、先生一體尾田を何んにお使ひなさるのです』と番頭は容子ありげに岡村に聞いた。

『會計を委せるのです』と岡村は事も無げに言つた。

『ヱ』と重役と番頭は顔を見合せた。

『一體如何言ふ御關係で尾田をお使ひなさる事に成つたのです』と重役は岡村の顏色をうかがつた。

『僕は一體牛丸君に來て貰はうと思つたのですが、彼の人は社の整理をする方に、是非入からと言ふ事なので、尾田君に來て貰ふ事に成つたのです』

『先生、會計は貴方が確固り遣らなきや、否ませんぜ』と重役は言つた。

『僕は其の方は不得手だからなア』

『困つた旦那だなア』と重役は笑ふ。

『じや先生、監督を嚴重に成さいまし』と番頭は注意してくれた。

『そんなら、君が來て會計を遣つて呉玉へ、君が僕の處へ來て會計を遣つて呉たつて、可いと思ふな』と岡村は言つた。

『否、最早御免を蒙りましやう、最早こりくしました』

『サア、上等の預かり書が出來た』と竹原は書付けを持つて來て番頭に渡す、番頭は書付けに一通目を通して、

『此れで結構です、此へ證券印紙をはつて先生の御印を願ひます』と言ふ。

『印紙なんか入用のかへ、煩雜だなア、お前仕てお上げ』と書付とポケットから實印を出して常子に渡す。

『先生は面倒くさがりやで居らつしやるが、其れでは商賣は出來ませんよ』と重役は言つた。

『何にいざと言ふ時に成れば、すつかり商賣人に成つて見せますよ』

『怪しいもんだなア』と二人は笑つた。

二人は書付を貰つて歸つて行て仕舞つた。

『今夜は此處へ何人が宿るんですか』と父親さんの吉本さんは心配して聞く。

『奥さん、貴方の處は何時轉居て來るのです』と竹原は常子に聞いた。

『明日轉居ておいで』と岡村は言ふ。

『マア、明日ですつて、荷物など少しも片付けてなどありませんから』と常子は云ふ。

『轉居るよ、僕は今夜は先生の處へ行くから歸るのが遲くなるし、明日は早く起きて畵伯連中の處へ、轉居した事を知らせに行つて、轉居がちやんと濟んで、片付いた處へ歸つへ來て遣る』と岡村は言ふ。

『じや今夜はお隣に願つて、私は此れから直ぐ歸つて片付けて、明日轉居ましやう』

『岡村君、君も少しは手傳つて上なきや、奥さん一人ぢや、大變だ』と何人かゞ言ふ。

『僕は轉居は大嫌ひなんだ』

『夫が居て呉ない方が、可いのですの、一度手傳つて貰つて、叱られるので上氣あがつて仕舞ひましたから』

『其りや僕に叱られる筈さ、氣を働かせないで手足ばかり動かすのだから、簞笥を一つ据付けるのに、二時間も掛るんだもの』

『マア、僞ばかり』と常子や呆れ顔。

『と、其れは比喩だ、簞笥を二時間も座敷中を持つて歩かれて耐るものか、女つて情ないものだ、物の比喩がわからないのだからな――。だから僕は女子は』と夫の女子禽獸論が出さうに成つて來たので。

『私、お隣に行つて此夜の留守居を頼んで來ます』と常子は下へ行つて仕舞つた。

入れ違へに貞ちやんが上つて來た。

『父ちやん、此方が亦坊のお宅に成つたのね、嬉しいわ』とにこにこ笑つて居る。

『そら禽獸の卵が來た』と岡村は貞ちやんを見て言ふ。

『禽獸の卵は面白い』と皆なは大笑に笑つた。

創業

今日は二十八日、あと一日で明後日は三十日、主人の岡村は朝早くから、人車に乘つて櫻田本郷町の家を飛び出す。

下座敷の八疊へ帳場格子を置いて、畫報社の賣捌係りで有つた、嶋村と云ふ人が賣捌きの主住として一生懸命に遣ると云ふ、尾田が當分の處、會計主任又店の總べての事務を一人で遣ると云ふ意氣込、其れから畫報社から此れが一番可い小僧と云ふ觸れ込みで、貰つて來た近造と言ふ十六七の小僧が一人とで、店は都合三人。

『先生、何々堂とか、何社とか看板を出さなきや否ませんがね』と嶋村が岡村に言つた時。

『サア、何んとしやう、諸君何と付けやうか』と言つて皆なに相談した。

『何に彼にと面倒くさい名を附けるより、此處が櫻田本郷町と言ふのだから、櫻田社と仕様じやないか』と何人かの發案。

『それが可い』と皆なも大賛成。

『櫻田社もをかしいが、マア可いや何でも』

と岡村も其れに賛成して、轉居すると直ぐ櫻田社と言ふ看板を出した。

先生は岡村が事業を引受けた、後の模様を心配してわざ〳〵見舞ひに來られた時、此の看板を見て不機嫌の様だつたとは、常子が後から、或人に聞いた話だが、何しろ畵報社と少しも關係の無い看板を出されては、困ると先生のお話しで、櫻田社とならべて、畵報發賣處と云ふ看板を出した。

尾田も嶋村も朝一度社へ來て、又思ひ〳〵の方面に用達しに出かける。編輯の人達も二階へ來て居た。

午後、伊豫へ歸つた梅子の處から電報が來た、今日は梅子が東京を立つてから四日目、と常子は梅子の安否を心待に待つて居たのだから、電報を受取つた時思はず常子の胸がドツキとした、梅ちやんは安々と受合つて歸つて行つたが、父親は承知して下さるだらうかとは梅子が出發て行つてから、始終常子の心を惱ます種で有つたので、今電報を受取つて何んと云ふ事なしに驚いだので有つた。

吉か、凶か、直ぐにも開いて讀まうとしたが、夫が歸つてからと大切に電報を用箪笥の引出しに、仕舞はうとしたが、一寸でも見たくつて耐らない、開封したとて夫から叱られは仕無いのだが、必度悪い電報じやないのだから、と一人で定めて思ひ切つて仕舞つてしまつた。

朝出た岡村は晝にも歸らず、日が暮かゝつても歸つて來ない、用達から歸宅つて岡村の歸りを待つて居た嶋村は、常子に傳言を頼むで歸つて行つた。

嶋村が歸る一足ちがひに、尾田も歸宅つて來た、岡村が未だ歸らぬと云ふので、常子に、

『じや、岡村さんがお歸りに成りましたら、此れをお渡し成さつて下さい』

と常子の前に出したのは、銀行の預金帳と未だ外に薄い帳面が二冊。

『此の帳面は何んですの』と常子は二冊の帳面の説明を聞く。

『此れは小切手、此れは約手の帳面です』

と尾田は言ふ。

『何んにするものなのです』

『貴方、御存ないのですか』と尾田は言ふ。

『エ、、小切手帳なんて初めて見るのですわ』

『さうでしやうな、商業を始めると、さう言ふものが入用のです、今に段段おわかりに成りますよ、岡村さんは御存じでしやう』

『夫だつて知らないでしやうよ、ア、其れから今日の登記は如何なりまし

た』

『事なく濟みました、此れが契約書です』

今日は畵報社から六ケ月、岡村が發行及發賣權を、借りると言ふ契約を、公證役場で取りかはす事に成つて居て、其處へは尾田が岡村の代理に行つたのだ。

『色々、お世話樣でした』

『如何致しまして、お金の方は可いのてしやうか』

『可いのでしやうよ』と輕い返事。

『じや安心でず、左樣なら』と尾田も歸つて行つた。

金の心配に出た夫の歸りの遲いのは、可い方か惡い方かと、常子は思ひ迷つて、家の前を通る車に、瞞着されて幾度、玄關へ飛び出したか知れない。

燈が付くと間もなく、岡村は歸つて來た。

『貴方、梅ちやん處から電報が來ましたよ』

と出迎へた常子は夫の顏を見ると、いきなり吐鳴つた。

『馬鹿、聾じやない何んと言つて來た』と岡村も靴をぬぎながら聞く。

『未だ見ませんの』と常子は座敷へ引返す。

『見れば可いのに』と岡村も後から座敷へ來る。常子は引出しから電報を出して夫に渡す、岡村は、常子の手から電報をうばうやうにして開いて見た。電報には、

アス五〇〇デンヲクル

と有つた。

『助かつた』と岡村は叫むだ。

『マア、可かつた』と常子は思はず嬉し涙が滲れた。

日常着に變へて、夕飯の膳に向つた、岡村は、

『ア、、梅ちやんの父親のお蔭で、此度は大助かりをした』と安心の吐息を付いて杯を取り上げた。

『眞實にねえ』と常子も嬉くつて耐らない。

『今日僕は出先で實はしよげて仕舞つたのだ、梅ちやんの方は當に仕て居なかつたんだからね、行く先も〳〵君の樣に足元から鳥の立つやうな事を言つたつて駄目だと言はれて、絶望して歸つて來たのだが、マア可かつた』と岡村も心から嬉しさうだつた。

『尾田さんも嶋村さんも先程まで、貴方のお歸りを待つて居らしつたのですが、餘り遲いので私に言傳けをし、お歸りに成りました』と先程の帳面や契約書を出して見せる、岡村が預金帳を開いて見ると、畫伯が心づくしの三百圓がちやんと記入して有る。

『此れと梅ちやん處のと合せて八百圓、未だ少し足んな』と主人は考がへる。

『吉元さんが、お友達から百圓位は借りて來ると言つてらつしやいました、其れから吉本さんの知つてる、アイスも貸しさうだと言つてゞしたよ』

『さうか、だがアイスだけは御免蒙らう。彼は後の祟が恐いからな、お友達の方のを盡力して貰はう、お前も赤坂へ行つておいで』

『最早赤坂では借しちやくれませんよ』

『今迄のが借頂戴れだからなア』

『けれど、マア話して見ましやう、解ない祖母さんじやないのだから』

『此度は必度返すと言へば可い』

『今迄だつて、返す〳〵と言つて返さないのですからねえ』と常子は笑ふ。

『それから嶋村さんが、畵報も雜誌も秀英社で明日刷り上げると言ふから明後日が製本一日には發行が出來ますと、言つてました』と常子は言ふ。

『さうか、それは都合が可い、それからお前に可く言つて置が』

『ハイ』と常子は容を改める。

『此度、僕が此の事業を引受るに付いては、諸君が僕に同情を寄せられて艱難を共に仕やうと、言つて呉るのだから、お前も其積りで今迄は月給で喰つて居たから、好いやうなものゝ、此れからは社の少しの利益で喰べて行くのだから、一生懸命に儉約して、僕等ばかりが、贅澤をして居るなどとは、決して思はれぬやうに仕てくれ』と猶色々と岡村は常子を喩した。

愈よ、雜誌屋の主人と成つた、岡村は三十日終日、店に座らせられて居た、種々の掛取りが、入り變り立ち變り來た、始めて此んな目に合た岡村は、忙しいのに驚いて仕舞つた。

『最早、今日は來ないでしやう、御苦勞樣でした』と尾田は岡村を見て笑

つた。

『商賣なんて恐るべきものだ、僕一人では到底も出來んな』と岡村は言ふ。

『何に、慣れば何んでも有りませんよ』と側から嶋村は慰さめた。

『そうだらうな、僕最早用が無ければ、二階へ行きますから、後から皆さんに上げる俸給を君持つて來て吳玉へ』と岡村は立ち上がる。

『ア、一寸』と嶋村は岡村を呼び止める。

『何んだへ、君』岡村は嶋村の机の前に來て中腰に成る。

『貴方、先生から畫報社が大賣捌きに、前借の有る事をお聞でしやうな』

と嶋村は言ふ。

『ウン、聞いた千圓以上も有るのだとさ、始先生は其んな事は斷じて無い

と、言つたのだが、僞をつかれたのだから、文句も言ひたかつたのだが、先生に對して何にも言はん積りだ、けれど畫報社の奴らは實に怪からん』

と岡村は怒る。

『此度、發行所は違つても、品物は一つですから、賣上の内から幾分かづつ畫報社の前借りを、差引かれるのですが』と氣の毒さうに嶋村は岡村の顏を見る。

『仕方がないさ、里子を取つて遣つた上に、親の借金まで拂つてやらなきやならない、里親は隨分つらいなア』と岡村は言ふ。

『眞實です』と二人も岡村に同情する。處へ、

『如何だね、利益そうかね』と唐紙を開けてニュッと頭を出したのは、杉

畵伯。

『商賣も仕無い内に利益て耐るもんか』と岡村は言つた。

『そんなもんかな』と杉畵伯目をぱち〳〵やつて、けろんとして居る。

『サア、二階へ行かう』と杉を促がして岡村は立ち上がつた。

二階は編輯の人達ばかりでなく、畵伯三人も始めての、三十日を氣付かつて容子を見に來て居るのだが、店に遠慮して今迄は杉畵伯が持ちまへの、高笑ひも下へは聞えなかつたのが、岡村が二階へ上つてからは急に喧かに成つた。

暫くすると、尾田が皆んなの俸給を狀袋に入て持つて來て名々に渡す。

『貰つても可いんかな―』と正直な江木は氣の毒さうに岡村の顏を見た。

『君、不用んきや僕が貰はふ』と竹原は横から、口を出す。

『何にそれにも及ばないよ』と江木はぢろりと竹原を見た。

『岡村君一寸々々』と物蔭から呼ぶので岡村が行つて見ると、松谷杉の兩畵伯。

『眞實に貰つても可いのですか』と松谷は岡村の顏を氣づかはしさうに見る。

『可いんだとも、君』と岡村は嫣然笑ふ。

『ぢや可いけども』と杉は手に持つた狀袋を始て懷中に入る。

『松谷君、心配しないで取つて吳玉へ、君達のお蔭で今日は無事に濟んだのだ。難有う』と岡村は松谷に禮を言ふ。

『お禮を言はれる程の事ぢやないよマア無事に濟んで可かつた』と松谷も安心した容子であつた。

日の暮る頃には皆な歸つて仕舞つた。常子は夫から今日の模樣を聞いて、『梅ちやんも、必度心配して居るだらうから無事に濟んだ事を、電報で知らせてやらう』と自分で電報を打ちに出かけた。

發行日

七月一日は櫻田社が始ての發行日未だ店の戸も開けない内に、製本屋が出來上つた畫報を持つて來て、どん〳〵戸を打く。

『今開けるよ』と小僧は戸を開けて遣ると。

『寢ぼうだナア』と製本屋の小僧は笑ふ。

『とツくに起きて居らア。』と小僧の近造は敗惜みを言つて居た。

『僞言つてらア』と製本屋の小僧はさッさと雜誌を運び込むと。

『百、二百』と近造は數を讀みながら、座敷へ積み上げる。

『此度は落丁がないよ、サア此れに判を押して吳玉へ。』と製本屋の小僧は帳面を近造に渡す。

『可しきた、文林は今日の何時だい。』と近造は聞く。

『夕方だらう』

『其いつは困るな、三時頃迄に持つて來て吳ないと、今日の發行にはならないから、成りたけ大急で遣つて吳るやうに、歸つたら大將に言ひ玉へ』

『ウン、其を言はう、左様なら』と製本屋の小僧は歸つて行く。

八時頃には賣捌き主任の嶋村が來る。

『おや、文林が無いね』と嶋村は近造に言ふ。

『夕方ですツて』

『彼れ程約束して置いたのに、今日は皆んな一處に渡せると、思つてたのに困るな——可し後で行つて付いて〻遣らせやう近さん、賣捌きに電話を掛て來てお呉な…』

『何時渡しです』

『さうだなア』と嶋村は時計を出して見て、

『今八時半と、直ぐ渡しますと言つてお呉、此處いらに電話を借る家が有るかね』

『有ります、角の菓子屋で貸して呉るんです』

『じゃ早く掛けておいで』

『ハイ。』と近造は走け出す。

『お早う』と岡村も店へ出て來る。

『お早う御坐います、電話が無いと不自由ですね。』と嶋村は言ふ。

『さうだナア。畫報社の電話を一ツ呉れば好いなア、電話位呉たつて可いぜ君』

と岡村は言ふ〻

『彼れは二ツとも抵當に入つて居るのだから駄目です』

『じやア仕方がない、其内如何かして買ふよ』
『電話がないと實際困りますよ。』
『眞實だ』と岡村も言ふ。
近造が電話を掛て歸つて來る暫すると大賣捌きの小僧や大僧が箱車を引いて發行の雜誌を取りに來る。
『今日は、最早何處から取りに來たい』と小僧は聞く。
『君が一番さ』と近造は言ふ。
『僞だい。』
『僞なものか、渡し帳を見玉へ』と渡帳を投り出す。
『ウン、可し〳〵、』小僧は何百何十と渡帳へ書き入れて。
『早く、吳玉へ大急ぎ〳〵』と近造を迫き立てゝ雜誌を受取り。
『僕の處の帳面へ付けたかい』
『付けたよ』と小僧が持つて來た帳面へ渡した數を書き入て判を押してやる。
『左樣なら』と小僧は大急ぎで車を引いて歸る。引き違へに。
『今日は何々堂に敗た、大急ぎで渡してお吳』
と小さな小僧が外から怒鳴込んで來る。
市内の大賣捌きに渡して仕舞ふと、此度は嶋村が近造に手傳はせながら地方へ送る荷造り、其れが出來上ると、新橋の汽車便に託しに、荷車に積んで持つて行く、近造も中々忙がしい。其の内尾田も來るひめのりを澤山

買ひ込んで、尾田と嶋村は個人注文のを宛名の表紙で手際可く卷いて山のやうに積み上げる。物めづらしいので岡村も暫く、店に居たが仕舞ひには坐わる處もなくなつたので、自分の家の方へ逃げ歸つて來た。

金の調達

此の十四日には千圓是非入用と、夫から聞いた時には、常子は何んなに驚いたらう、『十四日の賣上ではお拂に不足いのでしやうか』と夫に聞くと。

『お前に何にがわかるもんか』と叱られた。

『じや、其千圓のお金を如何してお調達なさるの』と夫に聞く。

『神戸へ行つて弟に相談する』と岡村は言ふ。

『それじや、餘程早くから行らしつて、御相談なさらないと、出し拔けでは神戸だつて困るでしやうよ』

『だから十日に此方を出發』

『十日と言つても、明後日ですわ。じやさう〳〵仕度を仕ましやう貴方何時に成つたら六百圓利益が有るやうに、成るのでしやう。』

『未だ始めたばかりじやないか、始の內は利益る處か、損を爲ると思つて居なけりや』

『さうですかね』と常子は言つて凝と岡村の顏を見た、其時。常子は不圖此んな事を心に思つた、六百圓利益が有るなんて、僞かも知れない、先生が何人かに瞞着されて、そして先生は僞とは知らず、夫に此の事業を引受

させなさつたのじや無いか知らんと思つた。

岡村は出發時に必ず弟に金を調達させるから、心配しずに居て呉と、尾田に可く言つて出發行いた。

神戸に行つた夫からは、無事に着いたと言ふはがきが、來たばかりで其の後は何んの便も無い、常子は心配で耐らない。

尾田も心配だと見えて、朝に夕に便が有るかと、常子に聞く。

『便が有りませんよ、如何したのでしやうね』

と此れが何時も常子の返事。

『困りましたナア』と尾田は

『其内、何んとか言つて來ますよ』と常子は慰める。

『電報を打つて見ましやうか』

『彼方だつて、一生懸命に奔走して居るでしやうから、電報などで催促をしないでも可いでしやう』

『其れも其うですたア』尾田と常子と顔を合せれば、毎日同じ様な事を言つて暮した。

十三日の朝梅子が歸京て來た、常子は味方が出來たやうな氣がして嬉ぶ梅子は歸國した時の模様、常子は梅子が留守中に有つた事を話し合つた。

其日の午後神戸から電報が來た。

アスカネデキル

と言つて來た、常子も尾田も此の電報を見て少しは心を安めた、併しデ

キルと有つて未だ出來たのでは無いから、若し明日の間に合なければ大變と、尾田は心配の吐息をついた。

十四日は朝早くから尾田は來て居て。

『奥さん、未だ電報は來ませんか』と心配相な顏をしては、岡村の住居の方へ幾度聞きに來たか知れない。

『ヱヽ、未だ來ませんよ』と返事をする常子とて、氣が氣ではないのだ。

晝頃に奥さん一寸と近造が常子を呼びに來る、行つて見ると、尾田は嬉〳〵然笑ひながら、

『來ました』と言つて電報を常子の目の前に差付ける。

一〇〇〇、一五ギンコウデトレ

と有つた、常子は安心して委頓したやうな氣がした。

尾田は此の電報を持つて、いそ〳〵と銀行へ金を受取りに出掛て行つた。

先の日の小切手

八月の中頃の事であつた、或日編輯へ遊びに來た、或る新聞社の社員が四方山の談の次手に、野口事件で有名な男三郎が、獄中で書いた面白いものが、或る辯護士の處に有ると話した、其れを聞いた岡村は其の男三郎の書いたものを、單行本として出版したら如何だらう、と言ひ出した。

『彼の大虚言吐の男三郎が如何な事を書いたらう、僕も見たいな』と何人かゞ言ふ。

『僕等ばかりぢやない、讀み度いと云ふ人が世間にも澤山有るだらうよ』
『出版して見たいな、けれど辯護士が其れを公にする事を、承諾するだらうか』と岡村が社員に聞くと、
『サー、辯護士とは私懇意ですから一つ聞いて見ませう』
『君、氣の毒だが早速聞いて見て呉れないか』と岡村は氣が早い。
『可う御座います、早速聞いて見ます』
其れから社員が辯護士に話した處が、承諾して呉れた、そして辯護士の方の條件は本の體裁はクロースかなんぞにして、餘り見惡い物を製へて呉ては困ると言ふ容易い條件で話しが纏まる。
じや、愈よ出版うと言ふので、見積を立てると、紙代、印刷費、製本費

全國の新聞へ出す廣告料、と五千部賣れてとんとんと言ふ見積りが出來た。
『單行物を一時に五千賣る事は、困難しい』
と賣捌き主任の嶋村は首を捻る。
『五千は大丈夫、七千は必度出ます』と岡村は受合つた。
『君、秀英社に刷りの事を談判して呉玉へ』
と岡村は尾田を秀英社に使に遣る、秀英社は如何か間に合せやうて承諾する。
『サア、此度は紙だ』と取引先の紙屋の主人に來て貰ふ。
樓田社が取り引きをする先は書報社が今迄取引をして居たと、皆一つ處だから始の中は書報社がいけなくなつた樣な顏をして、一時事業を中止し

たと見せ、其實岡村の名で新に遣り始めたと思つたから、内々皆んな心可からず思つて居た連中も、岡村に逢て色々の話を聞き、段々様子を見て居る内に、岡村が引受けてからの、苦心も皆んなの目に見え其んなら、そうであつたかと始めて此の頃は岡村に皆んなが同情を寄せて呉て、自分の事のやうに心配して呉れる者も、追々出來て來たから、紙を送る事を紙屋の主人に話すと、

『ア、可ろしい、何位でも送つて上げます』と心可く承諾して呉た。

『幾分か内金でも上て置たいのだが、今は少も金がないので』と岡村は正直な處を言ふと、

『可ろしう御座んす、じや小切手でも頂戴いて置きましやう』と言つた。

『だつて金も無いのに小切手は猶書ない』と岡村は言ふ。

『先の日の小切手ですよ』と紙屋の主人は言ふ。

『僕にや解らんな、先の日の小切手なんて事は』

『困つた商賣人ですね』と津田（紙屋の主人の名）は笑つて、

『小切手の日付を貴方が何月の何日には確に拂へると、思つた日に書き入れて下さるのです』

『若しも其時拂へなかつたら、如何するのだへ君』

『銀行が首に成りまさア』

『首つて』

『此奴は驚きますね、首と言ふのは取引中止手形なら、不拂手形何んの何

某と新聞の廣告に出ます、其うすると、何處の銀行とも取り引きは出來ないのです、併し小切手は刑法上の罪人に成るんだと思ひました』

『僕は嫌だよ。其んな恐ろしい物は書かんよ新聞の廣告位で濟む手形の方を書う』

『だから私達の方では、小切手の方が融通が付くのです、先生大丈夫ですから、小切手を書いて頂戴きましよう』

『ぢや仕方が無い書くがね、けれど手形だの小切手だのと調法なものが有るんだね』

と岡村は感心する。其の調法な手形や小切手のお蔭で岡村は遂に破産するやうな事になつたのだ。

苦戰惡闘

岡村が始ての計畫の單行物は、着々歩を進めて行く、知名の人々に序文を書いて貰ふ。其の序文を書たが爲に飛んだ迷惑を掛て、氣の毒な思ひをするやうな事が、後に持上がつた。

發行は九月の末、發行前から廣告が出たので、發行するとまたゝく間に五千部は賣てしまつたが、際物だけに後はパツタリ賣なかつたが、一時は中々の評判だつた。

或日岡村が古くからの友達が遊びに來て、

『如何も盛んなものだな、岡村は何にをさしても豪い事を遣ると、僕の社

（新聞社）の奴達なんぞ驚いてるぞ、併し彼んなものを發行するなんて怪からん、一ツ書いても可かと僕に聞いたが、書ても可いかね』と友達は言ふ。

『何んとでも悪く書いて可いよ、廣告に成るから』と岡村は言ふ。

『さうだ、無代で廣告を出して遣るやうなもんだ、此奴は恐れ入つた』と友達も大笑ひをした事も有つた。

十月には亦千五百圓不足と言ふので、此度は尾田が神戸の弟の處へ使に行く。

弟は無言で亦千五百圓耳を揃へて、拵へて呉た。

尾田が神戸から歸つて來た時、岡村は尾田に斯様言つた。

『尾田君、六月の三十日から今日までの金の出入、其他の事が一目見ても瞭然と分る書付を製へて呉玉へ、損は損で仕方がないから明細に書いてね、僕も其れを早く知つて此後の方針の立方を考へなきやならんし、編輯の諸君にも一度今迄の經過を報告して置く必要も有り、旁た至急送つて呉玉へ』と岡村が言つた時。

『ハイ、じや早速製へてお目に掛ます』

と事も無げに受合つたが、半月立つても一月立つても、書付を製へる様な容子は少しもなかつた、其は其の筈書付けを製へ度も、てんで尾田が事務を取り始てからの、帳面と言ふものが無いのだから仕方がない。尾田の無責任を怒つて、岡村に嚴く詰責しろと迫つた人も有つたけれど、

『一體何にも彼も尾田一人に委せて置たのが僕の失策で尾田一人を責るのは可愛相だ』

『けれど岡村さん、尾田君には色々不都合な事が有りさうですよ』

『マア可い、此れからは何も彼も僕が遣るから』と岡村は尾田を保護つて居た。

其の時から岡村が會計を遣事に成つた、と言つた處で岡村は常子に始の内は手傳せて居たが、仕舞ひには常子に任せつきり、委せられた常子は驚いて仕舞つた。

月の十日位に成ると、十四日の日附で出してある手形や小切手の金額を帳面に附上て、扨十四日の賣上は幾許有るかと、賣捌きの主任に聞くと、幾許も無くツて十四日の拂ひには到底足ない、其様筈は無い如何言ふ譯と聞くに、月末に拂ふべき仕拂を月始に廻して貰つて、月始に雜誌を發行と直ぐ大賣捌きから十四日の賣上の内を幾分か、前借りして來て月始の支拂をしますのだから、其れで十四日の入金が少ないのだと説明されて。

『ぢや此の十四日のお拂ひは如何するのでしやう』と常子も當惑して、岡村に相談すると岡村も。

『亦不足のか』と嘆息する。

『貴下最早可い加減に廢て仕舞はうでは有りませんか、毎月不足々々と其の度に定命が、蹉るやうですわ』と常子はつくぐ言ふ。

『廢すと言つても其う容易く廢せるものぢや無い』と岡村も思案に暮た。

此の時は京都に滯在して居られた先生を煩らはした、先生は態々岡村の爲に神戸に行かれた。神戸の或る有名な人は、先生の身に對して岡村の二度目の無心を聞いて金を出して呉た。

店と編輯

常子は個人注文の來狀を一々自分の帳面に控へて、切手は切手爲替は爲替と別々に仕末して、手紙や端書を一纒にして店に持つて來た。

『大矢さんは』(大矢と言ふ人は矢張畵報社の社員であつたのを、面倒な個人の發送係に頼むだのである、此の人は年は若いが正直なそれは〳〵頑固な人だ)

『大矢さんは齒醫者へ行きました』と其處に居た近造は答へる。

『餘り甘い物ばかり喰るから齒が悪くなるのだわ、ぢやア嶋村さん大矢さんが歸つたらこれを渡して下さい』と持つて來た來狀を嶋村に頼むで我家の方へ歸らうとして、近造が見て居る新刊の新小説や文藝倶樂部に目が付いたので、常子は其處へ坐わつて雜誌を見始めた。

『二階の連中は何時も呑氣で羨やましいな。少と變つて貰ひたい此方達の心配も知らないで』と帳面を前に置いて算盤ぱち〳〵やつて居た嶋村は、からりと算盤を側へ置いて愚痴ッぽい聲を出す。

『如何して二階の連中が呑氣なの、嶋村さん』と常子は聞きとがめた。

『でも奥さん、毎日々々パチリ〳〵と、闘球ばかり遣つてるぢやア有りま

せんか』

『さうねエ、呑氣相だわね、貴方がさうお思ひなさるのも無理はないけれど、貴方は畵報社の方ばかりに居らしつて、編輯所の樣子を御存知ないからですよ、それに家の編輯所は特別呑氣なので、外の編輯所の方などは家の編輯を大變羨やましがつて居らつしやる位です、けれど彼んなに遊んでばかり居るやうに見えても、仕事は正確に運んで行つてますわ。外の社で朝は八時出勤午後四時退出なんて、お役所みたいな事をするより、家のやうに皆さんの仕事の都合次第にして置く力が、如何なに仕事が仕可いか知れないのですよ、其の變り夜遲く迄仕事を成さらねばならぬ事もありましやう』と常子は永年編輯と一處に居たので、編輯所の說明を嶋村にすると。

『さう言ふものですか、私達は毎日帳面と首ッ引で、願ひましては何錢何厘と算盤を撥くのが仕事ですから、朝からパチリ〳〵やつて面白相に笑ふのを階下で聞いて居ると、時にはつく〴〵羨やましいと思ふのです』嶋村はやつと得心したやうな顏を見せた。

『さうですわね、貴方は何時も忙しいのですもの、其れにお金の心配をして下さらなければならないし、此の社でも早く利益とは行かなくとも、と〳〵に遣つて行かれるやうに成つて、皆さんのお氣も休めて上たいし、此樣に毎月不足々々では仕舞には如何なるだらうと心配でねと』常子も遂愚痴を言ふ。

『奥さん、赤坂のお母さんが來つしやいました』と女中の房が常子を迎へ

にきた。

『ハイ、今行きます、嶋村さん宅の、言ひ草ではありませんか、成るやうに外成らないのですから、貴方も餘り心配せずに、二階へ行つて皆さんとお遊びなさいましな』と常子は立ち上る。

『有難たう、處が私は未だ新米なので闘球に敗ては、何時もをごらせられるのですから、うつかり二階へは行かれないのです』と嶋村は笑つた。

常子は自分の住居の方へ來て見ると、里の母親は常子を見ると直ぐ。

『お常や、貞坊のを先へ縫つて持つて來たよ』

と持つて來た大きな包みを解きに掛る。

『有難たう御座います、外の小供は家に居るのですからゆつくりで可う御座います』

『片上げや、腰上も序にして來てあげたよ』

『マア、其れは恐れ入ました、じやア早速届けて遣りましやう』

『穩順くして居るかね』

『エ、、此の頃は全然學校に居馴むで仕舞ひました』

『でも幼少のに感心だね』

岡村の綿領娘の貞子は、今年始て小學校へ入學のだが、方々引越て歩いて居たから、最早中途からは何處の學校でも入學て呉ないので、家に居て父親から受次だ、やんちや心を心のまゝに發揮して皆なを困らせるので、遂此の間神田の佛英和女學校と言ふのへ、寄宿させてしまつたのだ。まだ

虎雄と言ふあばれッ小供が居るが、貞子が居ないだけでも岡村の家は餘程靜かに成つたのである。

『奥さん』と隣の編輯の二階から常子を呼ぶ聲がする。

『何んです、江木さん』と常子は大きな聲で階下から返事をする。

『昨夜紅蓮さんは來ませんでしたか』

『來ませんでしたよ』と常子は緣先へ出て來た、江木は二階から常子を見て、

『今日は』とにこ〳〵笑ひながら挨拶をする。

『奥さん、岡村君は』と此度は又た杉畵伯が二階の緣側へ現出る。

『おや杉さん、何時居らしつたの』

『今來たばかり』

『宅のは吾妻屋に朝鮮から來て居るお友達が居るので、逢ひに行つたのですから直き歸つて來ます、マア遊んで居らつしやい』

『紅蓮さんは來ないと、此奴は困つたなア』

と江木はさも困つたやうな容子を仕て居たが、亦た何にか考へだしたと見えて。

『奥さん、お手隙に一寸來らしつて下さい』

と江木は常子に言ふ。

『直き行きます』

『ぢやア何卒』と江木は引込む。

『さア、來い』と杉畵伯の太い聲が聞こえる闘球が始まるのだ。

『祖母ちやんが來てるね』と外から歸つて來た虎雄は、上口に脫いであつた母親の下駄を見て、嬉し相にかけ上つて來ていきなり祖母さんの首へかじり付いた。

『祖母ちやん僕をお迎へに來たんだらう』

『否え今日は御用が有つて來たのだよ』

『僕は毎日々々祖母ちやんがお迎へに來てくれるだらうと、待つて居たのだよさア行かう、母ちやんお宿りに行つても可いね』

『お前此の頃は大變あばれると言ふ事ぢやアないか』

『否え僕音なしいよ』

『僞ばかり、彼んなにあばれるくせに、其れだのに夜は私と何んでも一所に寢なければ承知しないのだよ、さうしておばアちやん〳〵と甘ッたれるのだもの』と母親は可愛さにたへぬ樣に虎雄を膝の上に抱き上げて、

『大きくなつたねえ』とつく〴〵虎雄のにこ〳〵笑つて可愛らしい顏を、あかず眺めて居た。

常子は編輯の二階へ上つて來た。

杉畵伯と鶴見は一生懸命に勝敗を爭つて居る、竹原は最早とうから此の社には居ない。

竹原は遂に岡村に對して恩を仇で返すやうな事を企てた、が其れは遂に成功しなかつた、其の事を或人は岡村に告げた、岡村は其を聞いて先づ立

腹よりは寧ろ竹原の心を憫んだ。直ぐにも退社させやうとして、亦岡村は幾度も躊躇した、岡村の机の引出には竹原の出社を斷わるべく書いた手紙の書掛が何枚あつたか知れない、けれども決して岡村は竹原の不德の行爲を責なかつた、暫は其儘にして置いたが、學問は無いが竹原は才子目から鼻へぬけるやうな利口者だから、他の無垢な社員の心までを傷つけられては、と其れを恐れてとう〳〵退社させてしまつた。

また一人の社員は自分から退社した、

編輯員が二人居なくなつた代りに、江木の友達の久保と言ふ人が入社した、此の人は和歌の名人だ。

『久保君は穩なしい何處か嫌味のない通人の若旦那と言ふ面影が有る』と岡村は久保を評した。

『江木さん、何んの御用なの』と常子は江木の側へ來た、原稿を机の上に積上て算盤を彈いて連りにページ數を調て居た江木は、

『奥さん、大變な事が持ち上つたのですよ』と目を丸くする、

『如何な事なのです』と常子は驚く。

『そら貴方も見ましたらう、久保君が何時か借りて來た畫の西洋雜誌、彼れを至急返して呉れと、貸してくれた人から言つて來たのです、處が此れが難問題なんですよ』

『私知つてますよ、其の西洋雜誌を女中が紙屑と間違へて、屑屋に賣つてしまつたのでしやう』

『サア、それ〳〵、如何しましやう』
『買はうと言つても無いものなんですか』
『丸善へ行けば有るです』
『じやア、買つて返しましやうよ、高價ものなんですか』
『一圓も出せば買へます』
『そんならわけばないわ貴方今日でも買つて居らつしやい、お金はあげます』
『それは有難たう、やつと安心したと』江木は嬉し相に笑つた。
『ナアンの事だい、如何な大變が持上つたかと吃驚した、馬鹿々々しい』
と杉は江木が大變な事が出來たと言つたので、闘球の手を止めて、江木の話を一生懸命にきいて居た處が、何んでもなく濟むだので惡口を言ふ。
『僕も吃驚したよ』と鶴見も言ふ。
『たつて僕には大變の事なんだもの、けれど諸君を驚かせて濟なかつた』
と江木は笑ひながら皆にあやまつた
『ヤ、鶴見君立派な洋服が出來たね』と杉畵伯は又吃驚したやうな聲を出す。
『此の間から着て居るよ君知らんのか』と鶴見は言ふ。
『僕は少とも知らなかつた、フウン』と唸り聲を出す。
『杉さん、大變感心なさるのね』と常子は笑ふ。
『だつて見違へるやうに立派に成つたもの』

『賞讃ても奢らないよ』

『鶴見君は此の頃女學校へ計り用事が有つて行くもんだから、嫌に洒落だしたのです』と江木は言ふ。

『嫉め〳〵』と鶴見は笑つて居る。處へ、

『ヤ、今日は』と背の高いひよろ〳〵した人が入來つて來た。

『紅蓮さん持つて來ましたかね』と其の人の顏を見るといきなり江木は聲を掛る。

『ウン、持つて來たよ』と其の人は早口に言つて、懷中から原稿を出して江木に渡した。

『紅蓮さん、如何したい』と杉畵伯も聲を掛る。

『如何もしないよ』と紅蓮さんは言つて鼻を擦る。

『紅蓮さん、是んばかりぢやア困るね』

と江木は原稿の枚數を勘定する。

『あとは明日持つて來る』

『當に成るものか、君が消て無なると行方知れずだからな』

『大丈夫だよ、ぢやア今から書いて遣らア』

と机の前に坐り込んだ。

『ぢやア君賴むだよ僕は此れだけ前へ秀英舍に廻して置う、奥さん貴方に紅蓮さんをお賴みして置ますから、僕は最早歸ります』

『ヱヽ、可う御坐います、今夜家へ宿ても書いて貰つて置ます、其れから

先程のお話しの西洋雑誌は如何なさるの』

『今日は廻る處が有りますから、明日此處へ來て其れから買ひに行きますぢやア如何ぞ願ひます、諸君左様なら』と江木は歸つて行く。

『奥さん、岡村君は相變らず酒を飲みますかね』と杉畫伯は常子に聞いた

『エヽ、飲むんですよ』

『困るなア、終ひに體を破損しは仕無いかと僕心配でね』

『私も其れを思はないではないのですが、何にしろ種々の心配が有るのでお酒を飲むと少しの間でも氣がまぎれるものですから遂飲み過ごすのですよ。折々は毒だからと、止るのですが、『マア、其んなに言つて呉るな、已だツて飲み過ごせば毒に成る位の事は知つて居る、けれど酒を飲むで居る内だけが已に取つては極樂なんだからナア』と言はれると、私も氣の毒に成つて心の内にははらはら思ひながらも、お酒を飲むでは否ませんとは言ひ悪いのですよ』

『それもさうだなア、併し如何かして澤山飲ませない工風を仕無ければなア、鶴見君何んとか可い智慧を貸して呉ないか』

『サア、如何したら可いかなア、けれど岡村君は他の言ふ事なんぞ中々聞かないから、困るよ』と鶴見は言ふ。

『僕が可い智慧を貸さうか』と紅蓮さんが言ふ。

『ウン貸して呉』と杉畫伯は頼もし相に紅蓮さんの顔を見る。

『催眠術を掛て酒が嫌ひに成るやうに仕て貰ふのさ、眞實嫌ひに成る相だ

よ』と紅蓮さんは眞面目で居る。

『其れは大事だ、其んな事を岡村君に進めやうもんなら、如何なに腹立か知れやしない、一番可いのは此んな商賣を止めて仕舞へば可いのだ、先づ僕は商賣を止める事を勸めやう、其れが可い、其れが可い』

と杉畵伯は一人言を言ひながら座敷中を大股に歩いて居た。

紅蓮さん

『紅蓮さん、貴方此の頃は何處に居らつしやるの』と常子が紅蓮さんに聞くと。

『本所さ』と紅蓮さんは答へた。

『本所か、紅蓮さんの住居て居さうな處だ』と杉畵伯は言ふ。

『何故だえ君』と鶴見は杉に聞く。

『だつて、昔、本所と言ふ處は七不思議があつた所ぢやないか、だから明治の代に紅蓮さんが本所に住居つて居るのは、自然の理ぢやアないか』

『人を明治の怪物だと思つて居る』と紅蓮さんは言つて、杉の言葉を氣にも止めずに笑ひながらさツさと原稿を書いて居る。

『此の間先生も紅蓮さんの事を、女除のお守りだと仰しやつてよ』と常子も言ふ。

『先生も悪言ことを言ふなア、マア、何とでも言ふが可いさ』と紅蓮さんは濟して居る。

紅蓮さんには、橋本某と言ふ名が有るのだが、社中では紅蓮さんの本名を呼ぶ者はなくつて、號の紅蓮洞と言ふのを、また儉約して紅蓮さんと言ふ。此の人は今は櫻田社の客員として、編輯を手傳つて呉て居るのだが、其の以前畵報社が盛んな時代美觀畵報と言ふ藝者の寫眞の澤山入つた、雜誌の編輯員として入社のであつた。

紅蓮さんは脊が高くッて、顔が長く色が黑い、一寸何んと形容して可いか解らない妙な人で。始て先生が社員に紅蓮さんを紹介した時、皆なは驚いた相だ。常子も此の人は氣が少し變では無いかとさへ思つた。其れが段々交際つて居るうちに、餘程普通の人と違つた處も有るけれど。小供らしい好人物なのだ。何をさしても大抵な事はさッさと遣て退る、其の上に數學は天才だと言ふ事だ。人の惡い連中が自分で面倒臭い事を紅蓮さんに賴むでも、何時も、

『可し〳〵』と心可く受合つて遣つて呉る。好人物と言ふ者は人から馬鹿にされるものだが、紅蓮さんは決して馬鹿にされないから豪い。

けれど紅蓮さんは立派な變人だ、其故四十歳に成つても細君も無くッて下宿住居をして平氣に呑氣に暮して居るのだ。

『紅蓮さん、君は世の中で一番何にが樂みだい』と聞く人が有ると。

『餘り樂みなんて事を思はないよ』と言ふ。

『ぢやア生存て居ても詰らないぢやアないか』

『死と詰るかね』と眞面目に聞かれると相手も閉口して仕舞ふ。

『紅蓮さんは此の頃餘程變だよ』と析々言ふ人が有る。

『如何變なんだい』

『サア如何と言つて只變なんだ』

『何んだつまらない』と皆な笑た事も有る、要するに紅蓮さんは妙な人なのだ。

此の頃の櫻田社の編輯は氣の免せぬ竹原が居なくなつたので、皆な呑氣に互に助合ふから、仕事はずん〳〵運んでゆく。

毎日出て來るのが鶴見と江木と久保、來たり來なかつたりする紅蓮さんちよい〳〵遊びに來るのが杉畫伯、松谷、田口の兩畫伯は此方から畫題を定めて持つて行つて、其れを畫に描いて貰ふのだから、出社來る必要がないから、めつたに出社來ない、岡村は毎日編輯に出て居るが、階下の店にはめつたに出て來ない、岡村には店の机にむかつて事務を取るよりは、二階で編輯の連中に人間學の講義でも聞かせる方が得意なのだ。

アイス

『ぢやア貴方、池田さんが來月ならばお金を調達て下さると仰しやるのですね』と常子は夫の顔を見る。

『さうだ、朝鮮へ歸れば千や二千位ならば、如何にでも成る』と言ふのだ。

『眞實でしやうか』

『まさか、僞言も言ふまい、併し來月僕が行かれなければ弟を朝鮮まで遣

る積りだ』

『神戸のが行つて下さるでしやうか、弟さんだつて家のお影で心配ばかり掛てお氣毒ですわね』

『仕方がないさ、其れはさうと三十日に落る約手や小切手を、來月まで待つて呉るやうに方々の取引先へ賴まなければ』

『他の月と違つて今月は十二月ですから、待つて呉ますか知ら』

『待つて呉なければ其れまでさ、此の事業を始てから丁度今月で半年だから、皆なが待つて呉なければ破産して仕舞ふまでさ、そして發行權を先生にお返し仕やう』

『さうですわね、好の話しでは澤山利益が有るやうでしたが。利益處か毎月損ばかりするのですもの眞實に今の內止て仕舞ふ方が可う御坐います』

と夫婦が話して居る處へ。

『お客樣が來つしやいました』女中が取次ぎに來た後から、さつさと客は上つて來た。

見ると有名な大澤と言ふアイスなのだ。

『おや來つしやい』と常子は客の席を設ける。

『今日は、何んか甘い話しでも有るかね』

と大澤は夫婦の顏を見て言ふ。

『甘い話しなんて有りませんわ』と常子は笑ふ。

『君、金を借さないか』と岡村はいきなり大澤の顏を見ると斯樣言つた。

『傀は最早嫌だよ、今月は返金て貰ほふと思つて今日來たのだ』と大澤は言ふ。

『今月はとても返金せない、其の變り來月は必度返金すよ』

『じやア仕方がない來月迄待たふ、利息だけ今日貰つて行こう』

『今は金が無いから月末に持たせて上る』

『困るな、マア可いや仕方がないじやア月末に間違ひなくね、時に如何だい商賣の方は』

『追々利益さ』と岡村は言ふ。

『何に商賣でも始からは利益ものじやアないよ』

『眞實だね、併し君の商賣は利益が有るだらうね』

『中々其うはいかないね、利益時も有れば損をする時も有るよ、金貸しだつて一ツの商賣だからね、損ばかり掛られては堪るもんか、一體借り手は蟲が可すぎるよ、高利を承知で借用て置ながら、借促すると慘酷だと怨むのだからな、俺の方に成つて考へて見れば、金を貸して遺つたり怨まれたり、實に埋らない事おびたゞしいね』と大澤相當の理屈を言ふ。

『君、僕は催促されても怨まないから貸して呉ないか、直き返金すが』と岡村は笑ひながら言ふ。

『澤山入用のかへ』

『五百圓ばかり』

『先のを一度返金したら、亦貸さう』

『そんな事を言はないで貸して呉玉へ』
『必度、返金すかへ』
『返金すとも』
『利息が高いよ、二割』
『年にかへ』
『笑談ぢやアない、三月でさ』
『高利んだね』
『暮の金だ、それで可ければ貸さう、金は用意して有るから、何時でも連帯者と一緒に來玉へ、だが大丈夫かな返金さないと眞實に困るよ』
『必度返金すよ、君』
『催促に來て亦口說き落されて仕舞つた』
と大澤は笑つて歸つて行つた。

年の暮

編輯の連中は春の雜誌の編輯に急がしい、皆な大車輪だ校正の出やうが遲いと印刷所と電話で喧嘩腰の掛合を始める人もあれば、朝から晩まで車で馳まはつて居る者も有つた。

店の賣捌き掛りは一日も雜誌が早く出來るのを祈つて居る。發行日が遲れると賣高が違ふから氣が氣では無いのだ。

十二月の二十日すぎ岡村は取り引き先の人達を集めて、三十日の拂ひを

來月迄待つて呉と頼むだ。岡村が虚言を言はぬと言ふ事を何人も知つて居るので、皆心可く待つて呉る事に成つた。が如何しても拂はねばならぬ處などが有つたので、大晦日は隨分苦戦であつた社員にも金部給料を渡す事が出來なかつた、外の月とは違ふのだから嘸皆なも困つたらうが、嫌な顔を見せる處か岡村を氣の毒がつて反對に慰めて呉るので、岡村の心は猶苦しかつた。

新玉の春は來た。岡村一家は昨日のまゝの心は變らない、岡村は大晦日の夜から風を引いて熱に苦しめられて居た。松の内に櫻田社の爲には泣き顔に蜂と言ふ事が出來た。

其れは岡村の文藝上の作物を集めて小説九篇と題を付けて出版する積りで丁度大きな印刷所が閉がつて居たので、小さい印刷所へ頼むで、暮の内に出來上る筈が段々おくれて最早一日二日中に刷上ると言ふ一月五日の晩に、其の印刷所が丸焼に成つて、刷掛は元より大切な原稿までも焼いて仕舞つた。初春の事とて皆なは今年中の事を豫言せられたやうに感じて落膽て仕舞つた。岡村は厄落しだと言つて皆なを慰めた。

一月には最速朝鮮へ行つてくれる筈の弟がなか〳〵出發て行かぬ容子なので、岡村は神戸へ出掛て行つた。

岡村が神戸に出發てから二三日すると、電報が來た、受取りに出た常子は直ぐ開封て見ると、朝鮮へ行つた弟から來たのであつた。

『金は出來さうだが急の間には合ない』と言ふ電報なのだ、此んな事では

十四日の支拂ひ日迄にはとても、金は出來ないと常子は思つたので、早速取引き先の人達に來て貰ふやうに方々へ電話を掛けた會計の尾田は此の頃取引き先の連中は全然信用を失つて仕舞つたので、言ひ譯をするのは常子の役なのだ。

十三日の朝、光榮社の番頭と、瀬山と言ふ廣告取次所の主人とが來た、常子は二人に電報を見せて、

『瀬山さん、明日の賣上だけでは支拂ひに不足ないので、弟が朝鮮まで金を調達に行つたのですが、とても明日の間には合ひませんから、お氣の毒樣ですが百五十圓の方の手形を今暫く銀行へ入ずに置てくださいな』と常子は瀬山に賴むだ。

『其奴は困つた、其の手形は今日の日附だつたので、最早昨日から銀行へ入て有るのです、だから彼の手形は今日落さして下さい、其のかはり後程百五十圓の小切手を持たしてよこしますから』と此の人は何時も心好く賴むだ事を承知して呉る。

此度は光榮社の番頭に、さんざ口を酸ぱくして、大口の小切手の方を待つて貰ふ事に賴む。

『尾田さん、貴方お氣の毒さまですが紙店二軒を受持つて下さいな津田も一ノ宮も私餘り口をきいた事がないから』

『承知しました』

『其れでは、津田は此の小切手と此の手形、一ノ宮は此の口を待つて貰ふ

のです』と尾田に書附を見せて、くれぐゝも頼む。

『可く解りました、じやア行つて來ます』

と尾田は受合つて出て行つた。

留主居役

『津田も一ノ宮も承知して呉ました』との尾田の報告に常子は安心して居ると、銀行から金が不足だから直ぐ持つて來いと言つて來たそんな筈は無いと譯を銀行へ聞いて見ると、待つて呉た筈の津田の二百圓許の手形が銀行へ廻はつて來たのであつた。

『尾田さん、彼の手形は待つて呉れなかつたのですか』と常子が尾田に聞くと。

『彼れだけは忘れて居ました、濟みません』と尾田は濟まして居る。

『マア』と今更驚いても悔んでも仕方が無い銀行が首に成つては大變と、嶋村は金を調達に出かける、常子も車を飛ばせて里へ金を借りに行く、此の前にも一度首に成りかけた時祖母に泣付いて、首をつないで貰つたなり未だ其の金も返金して無いので、此度は中々二百圓は扨て置き百圓も借しては呉れない、それをやつとの事で幾程か借りて歸る。銀行からは度々の催促、嶋村も今日は如何しても駄目だつた、と落膽て歸つて來る。最早如何も仕方が無いので、岡村の家の目星い物品を皆な無くして仕舞つた、やつと銀行の首をつないだ。

それでも明日銀行から、解約を申込んで來た、此れは銀行が取引き先へ對する厚意なのである。

朝鮮へ行つた弟は岡村が神戸に行つたとは知らないから、手紙をよこした、常子は手紙を讀むで絶望した、金は出來ないのだけれども始來た電報を見て居る店の嶋村は急には出來なくとも、やがては出來るだらうと思つて、取引先へ長い事はお待せ申しませんなどゝ、言つて言譯を仕て居たのを常子は知つて居るから金は出來ないのだと言つたら、彼の氣の小さい嶋村が、如何なに失望するだらうと思ふと、滅多な事は言はれないと、朝鮮から手紙の來た事なぞは言はなかつた。

神戸に行つた岡村からは便りが無い。手紙を出しても電報を打ても返事が來ない。何處に居るのだか居所さへも知れないので、常子は如何して可いやら途方に暮て仕舞つた。

岡村が居無いので家事一切を姑に頼んで、常子は朝から晩まで店に居て嶋村と入り變り立ち變り來る、取引先の人達の相手に成つて居る。夕方我家の方へ歸ると身も心も勞れきつて、ワツト聲を立てゝ泣きたい位だが、姑に心配を掛まいと思ひ、又天使のやうな小供たちの無邪氣さに心は紛れて、夢のやうに其日々々を送つて居た。

岡村からやつと手紙は來た、便が無かつたのは岡村が用事が有つて大阪へ行き、其所で病氣に掛つて一時は身動きも出來なかつたのだ。

手紙が來てから二三日立つてから岡村は病氣を押して歸京て來た。夫の

顔を見た時には何んとなく落膽したやうな氣がして、思はず涙が洩れた。

岡村は病身の身を寢床の上に起上がつて、取引先の人達に、三月に成れば弟が必ず金を調達すると受合つたから、三月まで今迄の支拂ひの殘部を全部待つて呉と頼むだ。

大江印刷所の主人は岡村の頼みを承知した上に、

『此んな事業は早くおよしに成た方が可い』と親切に忠告して呉た。

岡村は主人の親切を心から嬉しく思つた。

光榮社の番頭は、

『先生の仰しやる事を御尤と伺ふものですから社へ歸つて此社の爲に言譯をしますので社長から、お前は光榮社の者か櫻田社の人か、とさへ言はれます位で、手前共では此社の爲には隨分盡して居るので御座います』と言ふ。

取引先の人達は皆岡村の事を先生と言つて居る。雜誌社の主人を先生と言ふのも可笑しいが、旦那とは言ひ惡くつてねと何人も言ふので有つた。

義俠心

津田と言ふ紙店の主人に岡村が委細の話しを仕た時に、

『ハア、成程と！』津田は聞き終つて、腕を組んで暫くじッと考へて居た此の時津田に拂ふべき支拂ひは千圓以上だつたのだ。

『千五百圓ばかり有る通信社では西尾君が引受て待つて呉たのです。櫻井

や田中の製版所を始みんな承知して呉たのですが』と岡村は言ふ。

『宜ろしう御座います、待ちましやう』と津田は稍あつて決する所あるらしい容子で答へて、

『私の所も不幸福つゞきで有つたのが、此の二三年やつと信用を恢復しかけて來たので、今先生の處が破産すると成ると、私も共に破産するやうな事に成るのです、其う言ふ譯ですから、先生は遣る所までお遣りなさいまし、私も出來るだけお助けします、其れでもいけなければ、其の時は私も先生と一所に破産しましやう』とまで津田の主人は岡村に同情を寄せてくれた。

津田の家と言ふのは元は指折りの紙問屋であつたのが、他人の爲に一度破産して仕舞つて、津田の夫婦は一時別れに迄成つて、隨分困難辛苦してやつと此の頃芽を萠き始めて來た處なのだ。

『私も隨分苦勞を致しました、一層死んで終つた方がいくら好いか知れない、と思つた事も幾度有つたか知れません、私はたゞ一個の商賣人、先生は私達とは違ふのですから、此の位の事業を成功させるのはなんでも有りません』と津田は岡村を勵ましてくれた。

岡村は心の内で津田の主人の誠心を感謝した、と同時に社中を始取引先の人達までが、如何して此樣に自分に親切なのだらう、此の親切に對しても自分は一生懸命に此の事業を成功させなければ成らん、又た皆んなの同情でも必ず成功するだらうと信じて居た。

津田が承知したと言ふので何時も泣事ばかり言ふ一の宮紙店の主人も無言つて待つてくれる事に成つたが、此所に一ツ困つた事の出來たのは、各雜誌の表紙の色刷を仕てくれて居た、印刷所だけは支拂をしなければ、後の仕事を斷ると言つて來た、其れば かりでは無い、其所へは先の日の小切手が行つてゐたので、訴訟を起すと、印刷所の代理だと言ふ人が來て、此方の話しには耳もかさず、自分の言ふ事ばかり主張して、應對する岡村や常子を手こずらした。嶋村も幾度印刷所へ交渉に行つたか知れないが、如何しても話しが纏らなかつた。

一月はさう言ふ風でごた〳〵にすぎたので二月は發行がおくれた賣捌店からは何日發行々々と毎日のやうに催促してくる。其の度に店の嶋村は誠に相濟みませんと、言譯をして居た、

雜誌はやつと出來たけれども、色刷の表紙が他の印刷所へ賴で居ては間に合ないので、高價紙クロースを表紙にしたが、上品ではあるが俗うけの仕ない雜誌が出來た。

岡村は病氣を押して歸京て以來、咳も甚く出るし、熱も毎日有るので寢てばかり居るから、かんしやくを破裂させて家の者をちり〳〵させて居た

岡村の親友の吉野文士は、岡村の身を案じて折々尋て來ては、岡村の不遇を泣いて何時も心から慰めてくれる。岡村も吉野を唯一の賴みに思つて其の訪問を心待ちにして、來れば病氣も忘れたやうに樂しさうに快談するので、家族の者も吉野の訪問をよろこんで居た。

返品

主人の岡村は病氣で寢て居る、編輯も流行のインフルエンザに、皆なやられて何人も來ない日がおほい、店は嶋村と大矢と近造と三人ぎり、尾田はうやむやの内に退社してしまつた。

店も此の頃は閑暇なので、闘球盤を階下へ持つて來て、嶋村と大矢がパチリ〳〵と遣つて居る、近造も仕様がないので講談物を頻りに讀むで居る

店の前に車が止まつて、バタン、と箱車の蓋をする音がした。臺處事をして居た常子は、

『亦返品が來たのだよ』と呟いて嫌な顔をした。

『君、此れは今月の雜誌じやアないか』と近造の大きな聲がきこえる。

『だつて廣告が出ないから、今迄のやうには賣ないんだもの』と返品に來た本屋の小僧は言ふ。

『だつて店に置いておけば自然に賣らアね、今月の品を今から返して來るなんてひどいや』

『だつて返して來いと旦那が言つたのだもの左樣なら』と本屋の小僧はさツさと歸つて行つた。常子が店に來て見ると、

嶋村は渡帳を膝の上に置いて、頰杖を突いて頻に何にか考へて居たが、常子を見ると、

『奥さん、まア是を見て頂戴い、コウ返品が有つては仕方が無いでは有り

ませんか』と嶋村は渡し帳を常子に見せる、常子は帳面を手に取つて見ると、墨で書いて有るのが此方から賣捌きに渡した數、紅いインキで書いて有るのが先方から賣殘りを返して來た數なのだが此の頃は紅インキで計り書いて有つて、墨の處は殆ごない位だ。

『此れでは眞實に困りますね、今も内できいて居れば、今月の品までも返しに來たでは有りませんか、小僧の言ふやうに廣告が出ないから、賣が惡くなつたのでしやうよ』

『否、そればかりでは有りません、家の社が賣捌きに信用が無くなつたのです、此の頃は何處へ行つても、氣の故か私の顏を見て嫌ににや〳〵笑つて、御心配でしやうなんて言ふのですもの、癪に障つてねエ、けれど今に見ろ來月に成れば花々しい廣告も出すし、雜誌もぐツと好くして驚かして遣るぞと、腹の内では笑つて居るのです』と嶋村も金の出來るのを一日千秋と待つて居るのだ。

『奥さん、光榮社から少年少女の原稿をお早く下さいと言ひます』

と近造は電話を常子に取次ぐ。

『係りの人が病氣で出社せんから、早速聞き合せてお返事すると言つて頂戴い、弱り目に祟目ツて此の事だはね、皆さんも宅のも病氣だし、又來月も雜誌がおくれますね』

『おくれると、賣がぐツと違ふのですからね、困りますよ』と嶋村は嘆息する。

處へ運送屋の車力が、大きな箱を店の入口に持ち込むで來た。

『また大阪からウンと返品が來た』と近造は箱を見て落膽したやうな聲を出す。

『一體大阪の賣捌きは無情のですよ、品物が着くと庫の中へ積むで置いて地方から注文の來次第に一冊、二冊と送つて遣ので、賣捌き方を廣めてなごは決して呉ないのですつてそれならば始から少し注文すれば好いのに、ウンと取りよせて支拂ひも思ふやうにしないで、其の上とんでもない時分に殘品を返して遣すなんて、酷いわね雜誌屋なんて大賣捌きの御奉公をするやうなもので無益ものですね賣捌きは口錢を取るから利益があるけれど雜誌社は元をウンと掛て、品物が殘れば反古も同樣なのだから、差引勘定利益なんて有りはしない』と常子も今はつく〴〵愚痴も言ひ度なる。

『今にウンと利益が有るやうに成りますよ』

と嶋村は常子を慰めた。

弟の上京

梅の花さく三月の月始め、岡村は病氣をつとめてまた神戸へ出て行つた此度は大丈夫金が出來ると思つて居た當は全然はづれて、弟は一人の味方を連て、兄に變つて取引先へ言ひ譯に出て來た。

弟の顔を一目見た時金は出來ないのだと常子は思つた。

『宅のは如何しました』と弟に聞くと。

『姉さん、僕等も隨分此度は苦心したのですが、とう〳〵金が出來ないのです、兄さんは取引先の人に逢せる顔が無いから、歸らないと立腹て居るのです』

『それは合せる顔は無いでしやうが、貴方だつて金の生る木を持つて居らつしやるのぢや有るまいし、去年から幾度となく御心配を掛る度に、調達へてくださつたのですもの、眞實に有難たう御座いました』と常子は弟に心から感謝した。

『僕も兄さんの世話には隨分なつたのですからなア、僕の出來る事なら何んでもする積りなんでしたが、此度ばかりは如何しても僕の力に及ばなかつたのです』と弟は深い溜息を突た。

『僕等も急がしい體なのですから、じやア早速言譯に取掛らう』

と弟達はやすむ間もなく嶋村を案内者にして取引先を廻つて歩いた。

夜に成て二人はがつかりして歸つて來た。

『御苦勞様でした、話しは着きましたか』と常子が聞くと。

『如何してまだ中々』と弟は首を振る、

一緒に神戸から來た近藤と云ふ人も、

『何處へ行つても、隨分岡村君の爲に盡してくれた所ばかりだから話しが仕惡くつて實に弱りました』と言ふ。

『さうで仕様とも、何所でも親切に宅のが言ふ事を信じて、一生懸命に家の社の爲に盡してくれたのですから、眞實に氣の毒です』

と常子もつく〴〵言ふ。

『津田と云ふ紙店の家庭を見た時には、話しが如何しても急には口に出なかつた』と弟は言つた。

『僕も彼の温順な人の好ささうな細君の容子を見た時には、實際しよげたよ』と近藤も言つた。

其の次の日も、又の日も二人は馳廻つて居た、神戸に殘つて居た岡村も此方の模様を心配して歸京て來た。

弟達の奔走の模様を聞いて、暫く考へで居た岡村は。

『さう言ふ話しの仕方ではいけない、お前だつて神戸に歸つてから金の出來る當もないのに、後から送つて遣すなんて言つても駄目だ僕は今更皆な

の意見に從せて、破産でも何んでも仕て仕舞をふ』と岡村は言ひきつた。

『兄さん、僕等が此れまでに話しを付けるのは、實に容易の事では無かつたのですよ、金は一文も出來まぜんでしたとは、如何なに言ひ惡かつたか察してください』と弟は言ふ。

『さうだつたらうとも、其れは僕も好く察して居る』

『最早兄さんや、私達の考には及ばない事だから、何人か確實した人に相談しては如何でしやう』

『實際にさうだ、ぢやァ通信社の西尾君に相談しやう』

『アヽ、西尾君が好いでしやう』と弟も西尾を知つて居るので贊成する。

親切

岡村が手紙を書いて通信社へ持たして遣ると、早速西尾は來てくれた。
『如何だい、金は出來たかい』と西尾は笑ひながら岡村を見た。
『出來なかつたのだ、其れで君に御足勞を願ふやうな事が起つたのだよ』
『少しも出來なかつたのかへ』
『さうなのだ』
『其れは困つたな、其れで君如何しやうと言ふのかね』
『破産しやうと思ふのだ』
『其う容易く破産が出來る者じやないよ』

『破産するのにも手數が掛かるのかへ』
『さうさ、併し如何の雜誌も損なのかね』
『イヤ利益の有る雜誌が二ツ有るのだ』
『確實に有るかね』
『有るのだ此樣いふ見積なのだ』と西尾に見積書を見せる。
『ウン、成程！』と西尾は暫く考へて居たが
『此の案ならば皆が承知すると思ふね、先今迄の支拂全部を据置にして貰ふのだ』
『据置きになんぞ仕ては呉ないよ』
『サア、其所が相談なのだ、皆なが嫌だと言へば其れまでさ、其れでだね

承諾してくれゝば、此の利益の有る雑誌を皆なの手に渡して仕舞ふのだ、此の見積の通りに行けば諸雑費を引いても、まだ少しは残る其れを皆なが此の社に貸して有る金高に應じて、按分比例で分取のさ、今君の所を破産させたつて、何程づゝも分取られるものかね』

『其れは可い事を考へて呉れたね、實に有難い』

『併し、其れにしても少しは金が入用よ、如何ならば只御渡し仕ますと投り出したつて、何人が受取るものかね、だから二つの雑誌を出版する資本を付けて渡すのさ、資本と言つても七百圓もあれば可いのだから、其の位如何か成るだらう、十四日の賣上は何位有るのかね』

『此の頃はどん〳〵返品が來るので、賣上は何程もない、七百圓なんてとても無い、其の上に支拂ひ先へ賣捌きから十四日の賣上の内から幾程々々受取れと云ふ、委任狀が出てゐるのだ』

『委任狀の高は何程あるのだへ』

『澤山なのだ、何故そんな委任狀を出したかと言ふのに、三月の月始には必ず金が出來ると言ふ、見込だつたのだから、金が出來たら直ぐ委任狀と引かへすれば、可いと思つて書いたのさ』

『隨分不先見な事を仕たのだなア』と西尾は呆れる。

『だつて仕方がないのだもの』

『だから何頃最早可い加減に止玉へと僕が進めた時思ひきつて廢して仕舞へば、此樣に重荷を背負んでも可かつたのに』と西尾は殘念がつた。

『僕だつて、自分の利益ばかつり夢見て、此様に諸君にも迷惑をかけ、自分も身動きの出來ぬやうな、どんづまり迄來て仕舞つた譯では無いのだ』

『其れは僕も可く知つて居るよ、一體始から君が此様な事業を引受たのが間違つて居るのだ、併し要するに君の運の開ける時がまだ來んのだ』

『眞實に其うなのだね、此の事業を始てから一日でも心の休まつた時は無いのだよ、とうとう身體まで破損して仕舞つたらしい』

『まア〳〵、君は年もまだ若いのだから、此れんばかりの事にしよげないで、浮世を渡る試驗に落第したと思へば可いさ、其して此度の試驗には立派に及第して、世の中の人を驚かせてやるさと、西尾は岡村を慰めもはげましも仕てくれた。

債權者會議

取引先の連中が櫻田社へ集合つた、岡村は熱湯を飯む思ひで其の席へ出て來た、座に付いた岡村は頓に言葉が出なかつた。

『困つた事に成りましたなア』と暫くして光榮社の番頭が口を開いた。

『僕も實に皆さんに合す顔がないのだ』と岡村は力なげに言つた。

『先生の御胸中實にお察し申します』

と寫眞館の代理の老人は、誠心から岡村に同情を表した、併し何人も正面から岡村の違約を責る者は無かつた。

『金の出來なかつのを、我々が今更如何かう言つた處で仕方がないが、今

後を如何しやうと岡村さん、何んとかお考へが有るのですか』と問ひ掛た者があつた。

『サア、其れに付いて此所に一つ案が有るのです、皆さんには實にお氣の毒だが、今迄の支拂ひを當分の間全部据置きに願ふのです』

『其れは先生中々の難事ですな、若据置きに出來ないと言つたら如何なさるのです』

『僕は破産する迄さ』

『先生、破産をすると公民權も無くなれば、今後何にかに付いて御不利益ですぜ』と製版所の茨城は岡村の顔を見る。

『僕は文學者だから、公民權なんて不用いのだ』

『先生の方は其れで可ろしう御座いましやうが』と茨城は冷笑して不得要領な事を言ふので氣短かな岡村は立腹つて仕舞つた。茨城の解ない事を言ふのを、聞き兼た西尾は。

『私が岡村君の話しの續きを、皆さんにお話し仕ましやう』と大な身體を一膝前に進た。

『岡村君の案と言ふのは此樣なんです、据置きと言ふ事を御承諾願へればですね、此所に確實に利益が有ると言ふ、二つの雜誌を我々債權者へ渡して仕舞ふと言はれるのです、が併し只我々が受取つた所で、御同樣に新しく我々が資本を下して、此の事業を續けて行くと言ふ義務も責任もないのです』

『さうで御坐いますとも』

『其所で、其の資本は如何かして岡村君が造へやうと言はれるのです』と西尾は岡村に代つて説明した。

『此の見積通りに行くとすると、今廃刊て仕舞のは實に惜いですなア』と何人でも言ふ。

『先生の御案は至極可いとは思ひますが、我々は代表者なのですから、何れ歸宅りまして主人とも相談致しまして御返事を致します』

『併し今日は債權者頭の津田さんが見えませんが、彼の方は如何なお考へなのでしやう』と聞く者が有つた。

『津田は昨夜來ましたなア』と言はれた時には僕は穴が有つたらはいつて仕舞ひ度いと思つた』と岡村は今更に昨夜の模様を思ひ起して冷汗を流した。

『津田は据置きを承知したかね』と西尾は岡村に聞く。

『何にしろ、津田は二千圓以上あるのを全部待たなければならぬのだから大變さ、僕達の想像以外に津田の爲には打撃だらう、僕も氣の毒で耐らんけれど、今の所如何も成らんのだからなア、でも津田は仕方無いから据置きに仕ましやう、其の代り何卒此の事業を續けて居て下さい。さうしないと私が此の社の爲に損を仕たと言ふ事が同業へ聞ると、今後の私の商賣に差響きが出來るから、とくれ〳〵と言つて歸つた』と岡村は津田の口上を取次いだ。

『津田さんが其う言ふお考へなら、我々は津田さんよりは餘程荷が輕いのだから、今後とも出來るだけの御盡力を致します』と親切に言つて呉る者も有つた。

『私の社が第二に金高が澤山のだが、据置きと言ふ事を社長に頼みます。其うして皆さんとも話しが纏ると、確實した契約書を取り交さにやならん』と西尾は言つた。

『如何いふ契約書ですか』

『其れは岡村君と我々債權者の間に、出版物發行、及債務辨償に付いての契約書と、債權者同志の契約書を取り交すのです、其うしないと此の事業を繼續して行く内に、一人でも最早少しばかりづゝの分配金を貰つて居るのも、面倒だから一層訴訟を起して、一時に幾程か取つて遣らう、などゝ考がへる人が出て來ないとも限らないから、其う言ふことを防ぐ爲に契約書を取り交して置くのです』と西尾の考へは何處までも、綿密に用意周到だ。

皆なも西尾の話しを聞いて、成程と感心する。

『先生、一體總計で何位の負債が出來たので御座います』と聞く者が有る。

『支拂全部が九千圓計り、資本として借りたのが五千圓と合計一萬四千圓計です』

『月日の短い割には負債が澤山すぎますな、先生のお生活の方にも澤山入用のではありませんか』